

令和 6 年度全学教育科目

学生による授業アンケート報告書【集計結果分析編】

(令和 6 年度第 1 学期及び第 2 学期)

1. はじめに：新しい時代の授業アンケートへ	1
2. 令和6年度全学教育科目での授業アンケートの方法および分析の目的	4
2.1. 実施方法	4
2.1.1. 対象授業	4
2.1.2. 実施方法	4
2.1.3. 質問項目	4
2.2. 分析の目的と方法	7
2.2.1. 分析の方向づけ	7
2.2.2. 目的と方法	7
2.2.3. Google Gemini への自由記述データの入力	9
3. 分析結果	10
3.1. 回答数およびコメント数	10
3.2. 科目区分ごとの良かった点・改善点、まとめ	12
3.2.1. 外国語科目・外国語演習	12
(1)外国語科目・外国語演習の良かった点.....	12
(2)外国語科目・外国語演習の改善点.....	14
(3)大学生にとって良い外国語の授業.....	16
(4)外国語の授業での留学生の役割.....	17
3.2.2. 日本語に関する科目	19
(1)日本語に関する科目の良かった点・改善点のまとめ.....	19
(2)外国語科目・外国語演習と日本語に関する科目で求められている授業の違い....	20
3.2.3. 基礎科目	24
(1)基礎科目（文系）の良かった点と改善点のまとめ.....	24
(2)基礎科目（数学）の良かった点と改善点のまとめ.....	25
(3)基礎科目（理科）の良かった点と改善点のまとめ.....	27
3.2.4. 教養科目 主題別科目	30
(1)教養科目 主題別科目の良かった点.....	30
(2)教養科目 主題別科目の改善点.....	32
3.2.5. 教養科目 総合科目	35
(1)教養科目 総合科目の良かった点と改善点のまとめ.....	35
3.2.6. 教養科目 共通科目	37
(1)情報学の良かった点と改善点のまとめ.....	37
(2)統計学の良かった点と改善点のまとめ.....	38
(3)統計学と統計学の類似点と相違点.....	40
(4)体育学の良かった点と改善点のまとめ.....	43

3.2.7. 教養科目 一般教育演習（フレッシュマン・セミナー）	45
(1)一般教育演習（フレッシュマン・セミナー）の良かった点と改善点のまとめ....	45
3.2.8. オムニバス授業について	46
(1)学生が受けて良かったと感じるオムニバス授業.....	46
(2)学生がうまくいっていないと感じるオムニバス授業.....	48
4. まとめと考察	52
4.1. 学生が求める授業からみる授業改善の観点	52
4.2. 教員の授業に向けた想いと学生が求める授業の間の食い違い	55
付録 全体集計	57

1. はじめに：新しい時代の授業アンケートへ

高等教育推進機構高等教育研究部 江本理恵

【はじめに】

令和6年度に実施した全学教育に対する授業アンケートの報告書が完成した。今回も新しい分析手法を取り入れることができ、おもしろい報告書に仕上がったと思う。ここまで分析、執筆を担当してくれた部会の先生方に感謝を申し上げたい。

今年度は、生成系 AI の急速な発展に対応して、授業アンケートの自由記述を、生成系 AI に読み込ませて分析を行ってみた。この生成系 AI には、北海道大学 ELMS の Google Gemini 2.5Flash を採用した。この選択の理由は、北大の教員であればすでにアカウントがあるので気軽に使えることと、本学の ELMS の Google for Education の Gemini は機密性 2 の情報まで扱えるとして情報システムの最適化実現に係る確認申請が認められていることが挙げられる。ただし、扱う授業アンケートの自由記述は、記述した学生、対象の授業科目等の情報は削除し、自由記述のみを扱うこととした。

【生成 AI との試行錯誤】

筆者が生成 AI を本格的に使うのは、実は今回が初めてである。分析を始めた直後は、Gemini に「大規模言語モデルには対応していません」と冷たくあしらわれて落ち込んだりしたが、試行錯誤を重ね、与える情報量などを調整すると、こちらの指示通りに、場合によっては「気を利かせて」いろいろな分析を実施してくれるようになったのである。

まず、自由記述を似たような内容で分類し、カテゴリーを作成してもらった。次にカテゴリーに名前をつけて、代表的なコメントを抽出してもらった。加えて、カテゴリー毎にコメントのまとめをつけてもらった。さらに発展させて、本文のようなプロンプトで自由記述から授業に対する一定の知見を取り出すこととなった。

このプロセスで、Gemini に負荷をかけすぎて暴走してしまったり、無反応になってしまったり、時には記憶喪失に陥ってしまったりといった事態が発生した。相手は生き物ではないはずだが、最初に挨拶して、何か作業をしてもらったらお礼を述べて、時には気遣うとお互いに気持ちよく仕事が進められることもわかってきた。その結果が本文の「プロンプト」である。そして、授業担当者が自分で Gemini とやりとりしながら、自分の授業の良いところ、改善した方がよいところなどを探してみたら、相当におもしろいに違いない、と考えるところとなった。実際、アンケートの自由記述についてコメントしてくれる AI エージェントもあると聞いているので、導入することも選択肢の 1 つとして検討したい。

【授業の「良さ」と「難しさ」のバランス】

さて、分析していて気がついたことがある。それは、授業の良いところと改善した方がよいところとは表裏一体であることである。例えば、「授業内容はとても高度で難しかった」ので「わかってうれしい」学生がいる一方で、「わからなかった、いやだった」学生もいる、ということである。同様に、「課題内容が多かった」ので、「予習復習の習慣がつき、内容の理解に役立った」学生もいれば、「大変だったので課題を減らしてほしい」と考える学生もいる。

本来、大学で学ぶ学問は「難しい」はずである。授業時間外に自分自身の頭でじっくりと考え、問題に取り組み、実施に手を動かしてトレーニングをつまなければ太刀打ちできない分野も、大学にはあるはずである。全学教育はこれからの学問に立ち向かうための基礎トレーニングであり、確かに難しく、加えておもしろいとはなかなか感じられない科目もあるかもしれない。しかし、何事も基礎がなければその上に何かを築くことはできない。とても大切な科目でもある。

大学教員に求められるのは、この表裏一体のバランス力ではないだろうか。やはり学生には全力で「難しいこと」に挑んでほしい。そして、どうしても落ちてしまう学生が出ることは仕方がなく、そのような学生には授業とは違った形で何らかの支援を行うことが望ましいのであろう。何が何でも授業を学生の意見に合わせることに正しいわけではない。

同時に、この「難しいこと」に学生に取り組ませるにあたって、教える側の教員が「楽しそう」に教えていることは良い影響を与えるらしいことも見えてきた。一人で考え自分で手を動かして時間をかけて訓練しないと太刀打ちできない難しい分野だけでも、わかるようになると新しい世界が見えてきてとても楽しいんだ、という「研究者」としての姿を学生に見せることは、もしかしたら「わかりやすく説明する」こと以上に重要なことなのかもしれない。自分の授業はどうなんだろうか。もし気になるのであれば、自由記述をAIに読み込ませてきいてみてはいかがだろうか。

【授業アンケートの未来へ】

今回、生成系AIで自由記述の分析を行ったのには、もう1つ理由がある。

筆者は実は理学部物理学科の出身であり、当時、物理学科の1年生は、最初に「誤差論」を教わっていた。ここで「測定には誤差がつきもの」ということをたたき込まれ、「誤差の範囲」という言葉は筆者にとってもはや「座右の銘」である。物理学においては、どんなに精密な測定を行ったとしても、測定器の限界、環境の影響、測定者の癖など、様々な要因によって真の値とは異なる「誤差」が含まれる。この「誤差」をどのように捉えて扱うのか。物理学は「近似の学問である」とも言われており、測定値は常に誤差を含んでいるものであることは周知の事実として、そこから理論を構築していくこととなる。

これを授業アンケートの選択肢回答を数値化したもので考えると、この誤差はさらに大

きくなるものと考えられる。人間の感じ方は人それぞれで同じではないからである。ある人の「強くそう思う」と別の人の「強くそう思う」が同じである保証はない。いわゆる統計的な分析というのは、この「誤差」があることを前提として、例えば「違いがあるのかどうか」などを検討するツールである。そこで、最初に授業アンケートの選択肢を数値化した値で、因子分析やクラスター分析などの統計的な分析が可能かどうかを検討してもらった。その結果、この数値化された値にはほぼ差がない、統計的な手法で分析できないくらい数値が近いという結果が得られた。これは、授業アンケートを数値化した値が各科目でほとんど「差がない」ことを意味しており、1位の科目も10位の科目も、もしかしたら100位の科目も、その違いは「誤差の範囲」であり、どちらの値が高いか低いかという判定には使えない、ということである。

今回の報告書の作成を通して、以下のようなことが明らかになってきた。

- 1) 以前は扱いにくかった自由記述コメントが、生成系 AI の発展に伴って自身の授業改善に有用なデータとして柔軟に扱える可能性が明らかになったこと。
- 2) 全学教育の授業アンケートでは、選択肢を数値化した値はどの科目も十分高く、もはや差が存在しないこと。

この2つから、本学の全学教育の授業アンケートのあり方を見直す時期に来ていると考えることができる。令和8年度からは新しい学務システムに移行し、今まで以上に授業アンケートの実施に自由度を持たせることができる。次年度に向けて、時代にあわせた「授業改善に資するデータの収集方法」を検討していくべきであると考えている。

(参考)

情報システム最適化（調達関連）

<https://www.oicte.hokudai.ac.jp/ict/optimisation.html>

国立大学法人北海道大学における情報の格付け及び取扱制限に関する基準

https://www.hokudai.ac.jp/jimuk/reiki/reiki_honbun/u010RG00000949.html

2. 令和6年度全学教育科目での授業アンケートの方法および分析の目的

2.1. 実施方法

2.1.1. 対象授業

北海道大学において、令和6年度第1学期および第2学期に開講された全学教育科目を対象とした。授業の分類は表2.1の通りである。

表 2.1 授業の分類

分類項目	分類
授業形態	講義、演習
科目区分	教養科目（一般教育演習、主題別科目、総合科目、共通科目） 基礎科目（数学、理科、文系） 外国語演習、外国語科目、日本語に関する科目
必修・選択の別	必修、選択
受講登録学生数	25人以下、26～50人、51～100人、101～200人、201人以上

2.1.2. 実施方法

令和6年度に開講している授業科目のうち1つ以上の科目において、原則として授業最終回に学生に対してアンケートを実施するよう教員に依頼した。アンケートはWebで行われた。

2.1.3. 質問項目

質問項目数は最大28項目であった。質問内容は、シラバス、教員の教え方、学生の科目に対する行動や考え方、授業の感想などであった（表2.2）。

表 2.2 令和 6 年度 全学教育科目 授業アンケート質問項目

設問番号	項目	選択肢
設問 01	シラバスは、授業の目標、内容、評価方法を明快に示していた。（シラバスは初回授業時の授業方針の説明を含む。）	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない／当てはまらない
設問 02	授業はシラバスに沿って行われていた。（シラバスは初回授業時の授業方針の説明を含む。）	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない／当てはまらない
設問 03	授業で要求される作業量（レポート、課題、予習・復習など）は適切であった。	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない
設問 04	授業内容の難易度は適切であった。	極めて難しい／難しい／適切／やさしい／極めてやさしい
設問 05	教員の説明はわかりやすかった。（オンライン上で配信された教員作成の資料や説明文を含む。）	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない／当てはまらない
設問 06	教員の熱意が伝わってきた。	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない／当てはまらない
設問 07	教員の話し方は聞き取りやすかった。	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない／当てはまらない
設問 08	教員は効果的に学生の参加（発言、自主的学習、作業など）を促した。発言はオンライン上での投稿を含む。	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない／当てはまらない
設問 09	教員は学生の質問・発言等（オンライン上での投稿を含む）に適切に対応した。	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない／当てはまらない
設問 10	黒板、教科書、プリントや A V 機器等の使用方が効果的であった。	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない／当てはまらない
設問 11	この授業の自分の出席率は（ ）%程度であった。（出席はオンデマンド授業を閲覧したことを含む。）	100／80／60／40／20
設問 12	質問、発言、調査、自習などにより、自分はこの授業に積極的に参加した。（質問、発言はオンライン上での投稿を含む。）	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない／当てはまらない
設問 13	この授業 1 回（90 分）のための予習・復習に費やした時間は平均（ ）であった。	4 時間以上／3 時間／2 時間／1 時間／30 分以下
設問 14	シラバスに記載されている到達目標は、	10／9／8／7／6／5／4／3／

	() 割程度達成できた。(シラバスは初回 2 / 1 / 0 授業時の授業方針の説明を含む。)	
設問 15	授業により知的に刺激され、さらに深く勉強したくなった。	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない
設問 16	授業は全体として満足できるものであった。	強くそう思う／そう思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない
設問 17	この授業で良かったと思う点について書いてください。	自由記述
設問 18	この授業で改善した方が良いと思う点について書いてください。	自由記述
設問 19	その他、気づいたことがありましたら書いてください。	自由記述
設問 20	授業アンケートの実施方法や設問内容などについて、意見がありましたら書いてください。	自由記述
設問 21	【追加設問 1：コミュニケーション能力】 人間や社会に係わる事象や自然界の事象を主として言語を通じて正しく理解できること、自分の考えを的確に言語的に表現できること、相互にアイデアを交換できること。	
設問 22	【追加設問 2：人間や社会の多様性の理解】 各学問分野の専門家が、専門の壁を越えて行う授業を通して、それぞれの専門の持つ幅と奥行きを体験するとともに、自分が志望する専門以外の分野についても、積極的に視野を広げること。	
設問 23	【追加設問 3：創造的な思考能力と建設的な批判的能力】 根拠にもとづく推論とは何か、矛盾をどのように解決するか、公平で的確な判断をどのように行うかなどを経験することによって、独創的で批判的なものの考え方を理解し身につけること。	
設問 24	【追加設問 4：社会的責任と普遍的な倫理観】 制度や科学技術が高度に発達した社会において、人間としてあるいは市民としての普遍的な倫理について、具体的な事例の検討を通じて考えること。	
設問 25～	(教員が追加した設問)	
設問 28		

2.2. 分析の目的と方法

2.2.1. 分析の方向づけ

設問 01 から設問 16 について量的に分析することを試みた。「強く思う／思う／どちらともいえない／そうは思わない／強くそう思わない（／当てはまらない）」の 5 件法で回答している設問 12 間について、「強く思う = 5」「思う = 4」「どちらともいえない = 3」「そうは思わない = 2」「強くそう思わない = 1」として基本統計量を求めた（表 2.3）。なお、「当てはまらない」と回答している回答は除外した。

表 2.3 基本統計量（ $n = 25168$ ）

	平均	標準偏差	最小値	最大値	最頻値	平均+標準偏差	平均-標準偏差
設問 01	4.31	0.65	1	5	4	4.96	3.66
設問 02	4.34	0.65	1	5	4	4.99	3.69
設問 03	4.16	0.85	1	5	4	5.01	3.31
設問 05	4.03	0.91	1	5	4	4.94	3.12
設問 06	4.20	0.82	1	5	4	5.02	3.38
設問 07	4.15	0.88	1	5	4	5.03	3.27
設問 08	3.94	0.94	1	5	4	4.88	3.00
設問 09	4.16	0.77	1	5	4	4.93	3.39
設問 10	4.22	0.75	1	5	4	4.97	3.47
設問 12	3.87	0.90	1	5	4	4.77	2.97
設問 15	3.98	0.88	1	5	4	4.86	3.10
設問 16	4.18	0.81	1	5	4	4.99	3.37

注）平均+標準偏差のゴシック体は天井効果（上記設問は 5 件法であるため 5 以上）を示す。

表 2.3 からは、最頻値（もっとも回答数が多い値）はすべての設問において 4（思う）を示していることがわかる。また、平均+標準偏差はすべての設問において 4.7 以上であり、3 つの設問では天井効果（測定値が高得点に偏ること）を示している。これらのことは、授業アンケートに含まれている設問項目は、データ間の違いを評価することができなくなっている（弁別力がなくなっている）ことを意味している。

そこで、本報告書では量的データによる検討は断念し、質的データによる検討をすることとした。

2.2.2. 目的と方法

令和 6 年度授業アンケートの分析では、昨年度と同様に自由記述の回答データを分析することとした。自由記述の回答には、各授業に対する学生の率直な意見が述べられている。授業で良かった点と授業で改善した方がよい点の自由記述から学生にどのような授業

が求められているかを把握することで、教員は、学生の興味関心をひきつけ、学生がより主体的に学べる授業を設計・実施するためのヒントを得ることができると考えられる。

そこで、設問 17「この授業で良かったと思う点について書いてください（以下、「良かった点」）」、設問 18「この授業で改善した方が良くと思う点について書いてください（以下、「改善点」）」の自由記述の回答データについて、北海道大学 ELMS の Google Gemini（2.5 Flash）を用いて分類、分析した。

- (1) 「良かった点」および「改善点」の自由記述データを Google Gemini に分類させた。
- (2) 自由記述データをもとに、学生からはどのような授業を求められているかを出力させた。

なお、本アンケートのデータは、1 人あたり 1 データではない。ある学生が年間に 20 科目履修し、すべての科目で回答した場合、その学生の回答データは 20 データあることになる。

また、生成 AI の利用において、機密情報や個人情報の流出・漏洩等の可能性、生成 AI の技術的限界（生成物の内容に虚偽が含まれている可能性）などの留意すべき観点が指摘されている（文部科学省，2023）。機密情報や個人情報の流出・漏洩等に関しては、今回使用した北海道大学 ELMS の Google Gemini は、Google Workspace for Education が提供する学校用 Google アカウントである。Gemini アプリでのチャットの内容やアップロードされたファイルが人間のレビューアーによって確認されることや、生成 AI モデルの改良に使用されることはない（Google，2025）。また、前章の通り、北海道大学 ELMS の Google Gemini は機密性 2 の情報まで扱える情報システムの最適化実現に係る確認申請が認められていること、今回は自由記述のみを入力して分析していることの 2 点から、この留意点について十分に対応しているものとする。

生成 AI の技術的限界、すなわち生成物のハルシネーションやバイアスの問題については、分析者が Raw データを読み込み、出力内容と照合することで対応している。さらに、生成 AI の出力結果はその都度異なることがあるという指摘もある。しかしながら、それは生成 AI を使ったかどうかに限らず、自由記述データを含む質的データを分析する際には必ず指摘される点である（人が分析する場合は主観的解釈であることへの懸念や批判である）。これも、分析者が Raw データを読み込み、出力結果を深く解釈することで、対応していると考えられる。

Google（2025）．仕事用または学校用の Google アカウントで Gemini アプリを利用する Gemini アプリヘルプ Retrieved July 11, 2025, from https://support.google.com/gemini/answer/14620100?co=DASHER._Family%3DEducation&oco=0

文部科学省（2023）．大学・高専における生成 AI の教学面の取扱いについて Retrieved September 19, 2025, from https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2023/mext_01260.html

2.2.3. Google Gemini への自由記述データの入力

Google Gemini のプロンプト入力欄には文字数制限があるため、すべての自由記述データを一度に入力することはできなかった。そこで、科目区分ごとに入力していくこととした。また、上位区分ごとでも入力しきれない科目では、下位区分や学期ごとに分けて入力した。

「良かった点」「改善点」それぞれの自由記述を入力するごとに Google Gemini にて分類したのち、科目区分または科目の「良かった点」「改善点」をまとめた。

たとえば、後述の「3.2.1 外国語演習・外国語科目」の良かった点は、次の手順で分析を進めた。

- 1) 「外国語演習」のうち必修科目（英語）の自由記述データ（202 コメント）を入力し、分類した。抽出されたカテゴリーとサブカテゴリーごとに代表的なコメントを抽出した。
- 2) 「外国語演習」のうち選択科目（アジア圏の言語以外の第二外国語）の自由記述データ（536 コメント）を入力し、分類した。出されたカテゴリーとサブカテゴリーごとに代表的なコメントを抽出した。
- 3) 「外国語演習」のうち選択科目（アジア圏の言語）の自由記述データ（251 コメント）を入力し、分類した。出されたカテゴリーとサブカテゴリーごとに代表的なコメントを抽出した。
- 4) 「外国語科目」のうち必修科目の自由記述データ（559 コメント）を入力し、分類した。出されたカテゴリーとサブカテゴリーごとに代表的なコメントを抽出した。
- 5) 「外国語科目」のうち選択必修科目の自由記述データ（820 コメント）を入力し、分類した。カテゴリーとサブカテゴリーごとに代表的なコメントを抽出した。
- 6) 「外国語演習」と「外国語科目」の「良かった点」についての分類のまとめを抽出した。

3. 分析結果

3.1. 回答数およびコメント数

総回答データ数は 62,979 件であった（第 1 学期 16,763 件、第 2 学期 10,216 件）。表 3.1 には、科目区分（上位区分、下位区分）ごとの科目数、回答数を示した。

表 3.1 科目区分ごとの回答数

科目区分	必修／選択	科目数	回答数
外国語科目	必修	166	4,341
外国語演習	必修、選択	227	3,166
基礎科目	必修	197	8,966
教養科目 主題別科目	選択	112	4,362
教養科目 総合科目	選択	41	1,926
教養科目 一般教育演習	選択	129	1,504
教養科目 共通科目	必修、選択	37	2,653
日本語に関する科目	必修、選択	9	61
合計		918	26,979

設問 17「良かった点」に対する回答数は 9,668 件、設問 18「改善点」に対する回答数は 7,226 件であった（「特になし」など意見がない回答も含む；表 3.2）。

表 3.2 科目区分別の「良かった点」「改善点」の自由記述コメント数

科目区分	科目下位区分	回答数	「良かった点」 コメント数	「改善点」 コメント数
外国語科目	—	4,341	1,379	1,029
外国語演習	—	3,166	1,336	857
基礎科目	数学	2,444	787	607
	文系	997	386	292
	理科	5,525	1,788	1,477
教養科目 主題別科目	科学・技術の世界	1,389	516	362
	芸術と文学	576	262	164
	思索と言語	507	214	156
	社会の認識	1,363	578	401
	歴史の視座	459	152	108
教養科目 総合科目	環境と人間	612	213	160
	健康と社会	689	189	144
	人間と文化	401	126	100
	特別講義	224	100	71
教養科目 一般教育演習	—	1,504	723	486
教養科目 共通科目	—	2,653	883	782
日本語に関する科目	—	61	36	30
合計		26,911	9,668	7,226

注) 総回答データ数と各科目の回答数が一致していない理由は、回答の不備による。

3.2. 科目区分ごとの良かった点・改善点、まとめ

科目区分ごとに「良かった点」と「改善点」とそれらのまとめ、あるいはまとめのみを記載する。粒度の違いは科目区分に含まれる科目数や科目区分の特徴によって調整したためである（科目区分ごとの項目は目次を参照）。

なお、自由記述例（「」内）で「生徒」となっている箇所は、「学生」に変更した。

量が多いため、教員の皆様には、ご自身が担当されている科目区分を中心にご参照いただきたい。

3.2.1. 外国語科目・外国語演習

(1)外国語科目・外国語演習の良かった点

プロンプト：これまでの外国語科目、外国語演習の授業の「良かった点」について、まとめていただけますか？

学生の皆さんが外国語の授業で特に「良かった」と感じている点は、大きく以下の4つのカテゴリーに分けられます。

1. 教員の指導と関わり方

先生方の丁寧な説明、人間性、学生への配慮が、学習意欲の向上と安心して学べる環境の構築に大きく貢献しています。

説明の質・丁寧さ：理論的で明快な解説に加え、日本語を交えた説明や、聞き取りやすい話し方が高く評価されています。「理屈をもって解説してもらえるので、とても理解しやすかったところ」「話し方がゆっくりかつ聞き取りやすく、わかりやすかった」といったコメントが多く見られました。

熱意・専門性：先生方の学習への熱意や深い専門知識が学生に伝わり、学びを深めるきっかけとなっています。「先生にやる気があった事」「先生の熱意と優しさがとにかく素晴らしかった」といった声がありました。

学生への対応・雰囲気作り：学生に寄り添う姿勢、間違えても優しく対応する配慮、積極的な発言を促す雰囲気作りが、安心して参加できる環境を生み出しています。「間違えてしまったときも先生が優しく丁寧に対応してくれるので、間違いを恐れず発言できたところ」という意見は特に印象的です。

フィードバックの質：定期的なフィードバックや質問への丁寧な回答が、学生自身の理解度確認や学習の促進につながっています。「毎回のリアクションペーパーをもとに質問に答えたりしているところが良かったと思う」などが挙げられます。

2. 授業内容と学習効果

単なる語学学習に留まらず、広範な知識と実践的なスキルが身につくことが、学生に高く評

価されています。

総合的な言語スキル向上：会話、発音、読解、リスニング、ライティングといった多岐にわたる言語スキルの向上が実感されています。「話す機会を多く取ってくれていたところ」「毎週予習として指定の文章を読む必要がある点。標準的な難易度でちょうどよい長さの英文を毎週読むことで、英文読解に慣れることができた」「全て英語で行われる授業で初めは不安だったがリスニング力は非常に鍛えられたと思う」といった声が多く聞かれました。

専門知識・知的好奇心：言語学習を通じて、異文化（歴史、地理、社会など）や専門分野に関する知識を深められる点が好評です。「様々な分野について広く学べたこと」「歴史的に迫害された人やマイノリティであった人のことを学びつつ、英語で文章を書く能力を伸ばせたことが良かった」といった意見がありました。

学習内容の質：興味深い題材や応用的な知識が、学習のモチベーション維持につながっています。「題材が面白い物が多く、飽きずに取り組む事が出来た」「Glexa 上のコンテンツ内容が非常に面白く、特に Academic writing や生物学を英語視点で学ぶ講義などが面白かったです」などが挙げられます。

3. 授業形式と運営

学生が主体的に参加し、学習を継続しやすいように工夫された授業形式が評価されています。

参加型・活動重視：ペアワークやグループワークなど、学生が積極的に発言・交流する機会が多いことが、学習効果を高めています。「学生同士のコミュニケーションが中心で、楽しみながらスペイン語を学べたのが良かったです」「毎回他の学生と交流する機会があったこと」といったコメントが見られました。

課題・評価の適切さ：適度な量の課題や明確な評価基準が、学生の計画的な学習と達成感につながっています。「予習内容と復習内容が適切に示されていたため予習授業復習のサイクルがまわしやすく、しっかり定着した」「評価基準が明確だった」といった声がありました。

授業の進め方・構成：予習・復習の機会が定期的に設けられ、無理のないペースで進められる授業構成が好評です。「毎授業前回の復習から入り、授業の進みが適切で良かったです」といった意見が挙げられます。

教材・ツールの活用：音声付き資料や Moodle、Glexa などのオンラインツール、さらには洋楽や映画といった多様な教材の活用が、学習をサポートしています。「洋楽やニュースなどを英語で聞くことで様々な英語に触れ合うことが出来た」「Glexa を用いて自学習できた点」などが挙げられます。

全体的な満足度：授業全体が「楽しい」と感じられることが、学習の継続につながっています。「毎週楽しかったです！勉強も楽しみながら韓国語に触れ合えました」「1 年間の中で一番楽しい授業でした」といった率直な感想が多く見られました。

4. 環境・その他

学習の柔軟性や、語学学習以外のユニークな体験もプラスに作用しています。

柔軟な学習環境：オンデマンド授業や Zoom 参加の許可など、場所や時間にとらわれずに学習できる柔軟性が、学生のライフスタイルに合致し好評です。「唯一の遠隔授業であること」「出席が必須ではなく、オンデマンドな点が良かった」といった意見がありました。

交流機会：留学生との交流など、多様な背景を持つ人々との関わりが、学習意欲を高めています。「留学生もいてくれたおかげで、本物のフィンランド語の発音が聞けて良かった」といった声がありました。

ユニークな体験：語学学習以外に提供されるユニークな活動や体験が、授業をより魅力的にしています。「最後に行ったモルックが非常に楽しかった」「商品開発し、それを英語でプレゼンするという貴重な体験が出来た」などが挙げられます。

これらの点は、学生の皆さんが外国語科目の授業に対して抱くポジティブな感情と、その理由を明確に示しています。特に、教員の熱意とサポート、実践的な言語能力の向上、そして学習を楽しく継続できる工夫が、重要な要素として共通して挙げられています。

(2)外国語科目・外国語演習の改善点

プロンプト：これまでの外国語科目、外国語演習の授業の「改善した方がよい点」について、まとめていただけますか？
--

学生の皆さんから寄せられた自由記述コメントを総合すると、外国語科目と外国語演習の授業は、以下の主要なカテゴリーで改善の余地があると考えられます。

1. 授業内容・難易度・学習目標の明確化

レベルの多様性への対応：必修科目であるため、学生の外国語学習経験や現在のレベルには大きな幅があります。「難しすぎる」「簡単すぎる」といった両極端な意見があり、多様なレベルの学生がそれぞれのペースで学び、成長を実感できるような配慮が必要です。特に、長期滞在経験のある学生とそうでない学生とで、授業のモチベーションや評価への影響に差が生じることが指摘されています。

学習内容のバランス：文法学習とコミュニケーション練習、文化理解など、学習内容のバランスに偏りが見られます。特に、文法クラスとコミュニケーションクラスの連携不足が指摘されており、より統合的な学習機会の提供が求められています。

教材の質と適切性：教科書が「分かりにくい」「説明不足」「古すぎる」といった意見が多数寄せられています。学生の学習を効果的にサポートできるよう、より分かりやすく、かつ現代的で魅力的な教材への更新が必要です。

2. 授業運営・形式の改善

授業ペースの調整：教員の「話す速さ」や「授業の進度が速すぎる」と感じる学生がいる一方で、「遅い」と感じる学生もいます。学生の理解度を確認しながら、適切なペースで授業を進めることが重要です。

学生参加の促進と公平性：学生の発言機会やグループワークにおいて、「圧を感じる」「一部の学生ばかりが発言する」「不真面目な学生がいると影響が大きい」といった課題が見られます。全ての学生が安心して積極的に参加できる環境づくりと、公平な機会提供が求められます。

オンラインツールの効果的な活用：GLEXA や Moodle といったオンラインツールが、教材の閲覧性、課題の分かりやすさ、採点の明確さなどで改善の余地があると指摘されています。ツールの機能を最大限に活用し、学生が学習状況を把握しやすいよう、情報提供のタイミングや形式の統一が必要です。

3. 教員の指導・学生とのコミュニケーション

指示の明確化：課題や授業内活動の説明が口頭のみで分かりにくい、あるいは英語のみで指示が理解できないといった意見があります。重要な情報は書面や Moodle で明示するなど、多角的な情報提供が求められます。

フィードバックとサポート：宿題の解答や小テストの解説が不足している、あるいは提供されないケースがあり、学生が自身の理解度を把握し、復習を進める上で支障が生じています。丁寧なフィードバックと、質問への適切な対応が必要です。

教員間の連携と公平性：複数教員が担当する授業において、小テストの難易度や評価基準に差があることが強く指摘されています。学生が不公平感を抱かないよう、教員間での緊密な連携と、統一された評価基準の設定が不可欠です。

学生への配慮と尊重：学生の個人的な内容を全体の前で話したり、威圧的な言動が見られたりといった、教員の態度に関する深刻な指摘もありました。学生の人格を尊重し、安心して学べる学習環境の提供が最優先されるべきです。

4. 課題・評価方法の適正化

課題の量と質：「課題が多すぎる」「無駄に多い」という意見が多数を占めており、学生の負担が大きすぎると感じられています。他の科目の学習とのバランスを考慮し、効果的かつ適切な量と質の課題設定が求められます。一方で、宿題が少ないと感じる学生もいるため、目的と効果を明確にした課題の設計が重要です。

評価基準の明確化と公平性：平常点や授業内活動、テストの評価基準が不明確であるという意見が多数寄せられています。学生が何をすれば評価されるのかを明確にし、透明性のある評価を行う必要があります。また、テスト形式や採点方法（特に学生間での交換採点）が不公平につながるという指摘もあり、改善が求められます。

テスト内容と学習目標の整合性：テストが「暗記ばかり」「単調」で、真の英語力・外国語能力を測るものではないと感じる学生もいます。授業で身につけてほしい能力とテスト内容が合致しているかを見直す必要があります。

これらの点は、外国語教育全体の質を高める上で、継続的に検討し、改善していくべき重要な課題です。

(3)大学生にとって良い外国語の授業

プロンプト：これまで分類していただいた自由記述の「授業を受けて良かった点」と「改善した方がよい点」をまとめると、大学生にとって良い外国語の授業とはどのようなものでしょうか？

これまで見てきた「良かった点」と「改善した方がよい点」のコメントを総合すると、大学生にとって「良い外国語の授業」とは、単に知識を詰め込むだけでなく、学生が外国語を習得する喜びを感じ、実用的なスキルを身につけ、さらには学習プロセス全体を通じて成長を実感できるような授業であると言えます。

大学生にとっての「良い外国語の授業」の要素

1. 明確な目標と実践的な学習内容

良い外国語の授業は、学生が「何のために、何を学ぶのか」を明確に理解できるよう設計されています。

学習目標の明確化：授業で到達すべきレベルや身につけるべきスキルが具体的に示されることで、学生は学習に目的意識を持って取り組みます。特に必修科目においては、その言語を学ぶ意義や将来的な応用可能性を示すことが、学生のモチベーション維持に不可欠です。

実用性重視のカリキュラム：文法だけでなく、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングといった総合的な技能をバランス良く育成するカリキュラムが求められます。単なる暗記に終わらず、実践的な会話や文章作成の機会を豊富に設けることで、学生は「使える」外国語を習得できます。

適切な難易度と進度：学生の習熟度に応じた、きめ細やかな指導が重要です。基礎の定着から応用まで、無理なくステップアップできるような進度設定と、難しすぎる、または簡単すぎるという両極端な意見に対応できる柔軟な対応が望まれます。

2. 積極的な参加を促す授業運営

良い外国語の授業は、学生が能動的に学習に参加し、主体的に学ぶ機会を最大限に提供します。

多様な参加型活動：一方的な講義だけでなく、グループワークやペアワーク、ディスカッションなど、学生が実際に外国語を使って意見を交わす活動を多く取り入れることで、学習意欲と

定着度が高まります。

効果的なコミュニケーション環境：学生が安心して発言できる雰囲気作りが重要です。教員からの明確な指示と、学生の発言に対する丁寧なフィードバックは、コミュニケーションの質を高めます。また、教員と学生、学生同士の良好な関係性が、学びを深める土台となります。

デジタルツールの効果的活用：オンライン教材や学習管理システム（LMS）は、単に課題をこなすだけでなく、学習進捗の可視化、個別最適化された課題提供、学習資料のアクセス向上など、より戦略的に活用されるべきです。使いやすさや情報の一貫性も重要です。

3. 学生に寄り添うきめ細やかなサポートと公正な評価

良い外国語の授業は、学生の学習プロセス全体をサポートし、その努力と成果を適切に評価します。

丁寧な指導とフィードバック：学生の疑問や困難に寄り添い、分かりやすい説明や具体的なアドバイスを提供することが求められます。課題やテストに対する詳細なフィードバックは、学生が自身の課題を認識し、改善に繋げる上で不可欠です。

公平で透明性のある評価：評価基準が明確で、学生が「何をすれば良い評価が得られるか」を理解できることが重要です。教員間での評価基準の統一は必須であり、学生間の不公平感を解消するためにも、客観的で信頼性の高い評価方法が求められます。

学習モチベーションの維持：必修科目であっても、学生が外国語学習の楽しさや達成感を味わえるような工夫が重要です。文化的な要素を取り入れたり、自身の成長を実感できるようなマイルストーンを設定したりすることで、学習意欲を長期的に維持できます。

まとめると、大学生にとって良い外国語の授業とは、明確な学習目標のもとで実践的なスキルを習得でき、学生が積極的に参加できる運営が行われ、そして教員からの手厚いサポートと公正な評価を受けられる授業と言えるでしょう。

(4)外国語の授業での留学生の役割

プロンプト：「積極的な参加を促す授業運営」に関して、自由記述から留学生はどのような役割を果たしていたことがわかりますか？

積極的な参加を促す授業運営における留学生の役割

自由記述のコメントから、留学生は外国語の授業において、主に以下の2つの側面で積極的な役割を果たしていたことがうかがえます。

1. 授業内でのコミュニケーション促進と実践の機会提供

いくつかのコメントからは、留学生が授業において活発な発言をしていた様子がうかがえます。例えば、「毎回グループの一部の人が発言してしまう」というコメントは、特定のグルー

プメンバー（文脈から留学生も含まれる可能性が高い）が授業内の会話を主導していたことを示唆しています。

これは、日本人学生が英語や他の外国語を実践的に使う上で、ネイティブスピーカーまたはそれに近いレベルの話し相手として、貴重な機会を提供していたと考えられます。留学生の発言によって、授業内のコミュニケーションがより活発になり、日本人学生が「生きた外国語」に触れる機会が増えた可能性があります。

2. 学習モチベーションの向上と刺激

間接的な表現ですが、留学生の存在が日本人学生の学習モチベーションに影響を与えていた可能性も考えられます。「幼少期に数年間中国に滞在していた。（中略）その結果、授業やテストで無敵状態になってしまい、日本人の友達に『A+の枠を取るな』、『害悪すぎる』と文句を言われる羽目になってしまった」というコメントは、ネイティブレベルの学生（この場合は留学生と解釈できる）が、テストや授業内で高いパフォーマンスを発揮することで、他の学生に刺激を与えていた状況を示しています。

これは、日本人学生にとって「あのレベルを目指したい」という良い意味での刺激になったり、あるいは逆に「差がありすぎてモチベーションが下がる」といった課題にもつながる両面性を持っていたことがわかります。しかし、いずれにせよ、留学生が授業内の学習環境に大きな影響を与えていたことは間違いありません。

このように、自由記述からは、留学生が授業内のコミュニケーションを活性化させ、実践的な会話の相手となり、時には他の学生の学習モチベーションに刺激を与える存在として、外国語授業の「積極的な参加を促す」側面において重要な役割を担っていたことが推測されます。

3.2.2. 日本語に関する科目

(1)日本語に関する科目の良かった点・改善点のまとめ

プロンプト：「日本語に関する科目」の授業を受けて良かった点と改善したほうが良い点の自由記述から、学生に求められている「日本語に関する科目」の授業はどのようなものでしょうか。

「日本語に関する科目」の授業について、学生の「良かった点」と「改善したほうが良い点」のコメントを総合すると、学生が求めているのは、実践的な日本語能力を、多様な視点から、安心して学べる環境で、教員の熱意あるサポートのもと、無理なく習得できる授業だと言えます。

「特になし」というコメントが非常に多かったことから、学生の満足度は全体的に極めて高いことが伺えますが、より理想的な授業像として以下の要素が挙げられます。

「日本語に関する科目」で学生に求められる授業とは

1. 実践的で多角的な視点から、日本語を「使える」ようになる学び

学生は、単なる知識の習得に留まらず、大学生活やその先の社会で実際に役立つ日本語能力を身につけることを重視しています。

具体的な応用力を高める内容：論文やレポートの書き方、プレゼンテーション、インタビュー、日常生活での適切なコミュニケーションなど、「書く」「話す」といった実践的なスキルを向上させる内容が求められています。

知的好奇心を刺激する多様なテーマ：日本語学習を、心理学や哲学、文化など、多角的な視点から深掘りすることで、学生の興味を引き、より深い学びへと繋がる授業が望まれています。これは、単調になりがちな言語学習に新しい面白さを加える要素となります。

2. 学生が安心して発言・挑戦できる、温かい学習環境

特に言語学習においては、積極的にアウトプットする機会が重要であるため、学生が心理的な負担なく参加できる環境が不可欠です。

積極的な交流と安心できる雰囲気：教員が話しやすい雰囲気を作り、学生同士のグループワークやディスカッションを促すことで、異なる背景を持つ学生が互いに学び合い、コミュニケーション能力を高められる場が重視されます。

教員の丁寧なサポートと熱意：教員の優しく分かりやすい指導、学生からの質問への親身な対応、そして教育に対する熱意は、学生の学習意欲を大いに高めます。適切なフィードバックも、学生の成長を後押しします。

3. 無理なく、効率的に学習を継続できる運営

学習の質を維持しつつ、学生の負担を考慮した授業運営が求められています。

適切な課題量と明確な指示：学びに繋がる課題は歓迎される一方で、他の授業との兼ね合いを

考慮した無理のない課題量や頻度、そしてグループワークなどでの活動内容に対する明確な指示が求められています。

分かりやすくアクセシブルな教材：授業資料は情報量が適切で、視覚的にも分かりやすく、学生が復習しやすい形で提供されることが望ましいです。必要に応じて、予習資料の提供や、手書き内容の共有時間の確保なども効果的でしょう。

総じて、「日本語に関する科目」の授業においては、学生が日本語というツールを多様な側面から深く理解し、自信を持って使えるようになるための、支援的で魅力的な学習環境が最も求められていると言えます。

(2)外国語科目・外国語演習と日本語に関する科目で求められている授業の違い

プロンプト：「外国語科目」「外国語演習」はおそらく日本人の学生が、「日本語に関する科目」はおそらく日本人以外の学生が受講していると考えられます。「外国語科目」「外国語演習」と「日本語に関する科目」で求められている語学授業に何か違いはありますか。

「外国語科目」「外国語演習」を日本人の学生、「日本語に関する科目」を日本人以外の学生が主に受講していると仮定して、それぞれの科目で求められる語学授業にどのような違いがあるか、その焦点の違いを掘り下げてみましょう。

受講学生の背景が異なる語学授業における「求められること」の違い

共通して「使える語学力」が求められる中で、学生の背景によって、学習の動機、課題、そして期待するサポートの具体的な内容や優先順位に違いが見られます。

1. 学習の目的と動機における違い

項目	「外国語科目/演習」 (主に日本人学生)	「日本語に関する科目」 (主に日本人以外の学生)
学習目的	<p>「世界を広げるツールとしての語学」：</p> <ul style="list-style-type: none"> - 将来のキャリアや留学、異文化理解など、自己の可能性を広げるためのツールとしての語学習得。 - 大学の必修科目としての側面もあり、単位取得も重要な動機の一つ。 - 新しいスキルを身につけることへの知的好奇心。 	<p>「日本での生活・学習・キャリアのための必須ツールとしての日本語」：</p> <ul style="list-style-type: none"> - 大学での講義理解、レポート作成、日常生活（買い物、役所手続きなど）、アルバイト、将来の日本での就職など、日本で円滑に生活し、学習し、キャリアを築くための基盤としての日本語習得。 - 日本社会への適応を目的とした実践的なコミュニケーション能力の向上。
重視する点	<ul style="list-style-type: none"> - 異文化理解や教養を深める内容。 - ネイティブとの交流機会。 - 英語であれば、国際的なコミュニケーションに通用する発信力。 	<ul style="list-style-type: none"> - 大学のアカデミックな場面で通用する日本語（論文作成、プレゼン、ディスカッション）。 - 日常生活における実践的なコミュニケーション（インタビューなど）。 - 日本社会の習慣やルールを理解するための日本語。

2. 学習上の課題と求められるサポートの違い

項目	「外国語科目/演習」 (主に日本人学生)	「日本語に関する科目」 (主に日本人以外の学生)
主な課題	<ul style="list-style-type: none"> - 実践の機会不足：学校以外で外国語を使う機会が少ない。 - 失敗への恐れ：完璧主義や恥ずかしさから、発言をためらう傾向。 -モチベーション維持：必修科目としての受動的な学習になりがち。 - 基礎学力のばらつき：高校までの英語教育の差など。 	<ul style="list-style-type: none"> - 日本語の複雑なルール：敬語、助詞、丁寧語・普通体などの使い分け。 - 文化背景の違いによるニュアンス理解の難しさ。 - 高度な日本語表現：アカデミックな文章やビジネス文書の作成。 - 学習時間と生活の両立：学業と並行して、慣れない日本での生活を送る上での負担。
求めるサポート	<ul style="list-style-type: none"> - 発言しやすい雰囲気づくり：失敗を恐れず挑戦できる環境。 - アウトプットの強制と機会提供：積極的な参加を促すグループワーク、発表の場。 - 応用例の提示：将来のキャリアや留学にどう役立つかを示す。 - 基礎からの丁寧な導入（特に初習外国語）。 	<ul style="list-style-type: none"> - 複雑な文法や表現の丁寧な解説：特に多義性やニュアンスの違いの解説。 - 実生活に即した具体的なシチュエーションでの練習。 - 日本社会や文化に関する補足説明。 - 個別指導やフィードバック：特にライティングや複雑な表現について、細かな添削やアドバイス。

3. 授業運営と環境における違い

項目	「外国語科目/演習」 (主に日本人学生)	「日本語に関する科目」 (主に日本人以外の学生)
評価の視点	<ul style="list-style-type: none"> - 到達度と努力のバランス：ある程度の基礎知識は前提としつつ、授業への積極性や課題への取り組みも評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> - 実用性と正確性の両立：大学生活で困らないための実践力と、アカデミックな場面での正確性。日本での生活・学習・就職に直結するため、より実用的な側面が重視される傾向。
教材の工夫	<ul style="list-style-type: none"> - 飽きさせない工夫：多様なトピック、映像、ゲーム要素などで関心を維持。 	<ul style="list-style-type: none"> - 難易度と情報量の調整：情報過多にならないよう配慮し、複雑な内容は段階的に提示。予習資料や復習しやすい構成も重要。
教員の役割	<ul style="list-style-type: none"> - モチベーター：学習意欲を引き出し、外国語学習の面白さを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> - きめ細やかな指導者：言語だけでなく、日本の文化や社会への適応もサポートする。学習面でのつまずきに寄り添い、個別の質問にも丁寧に対応する。

まとめ

このように、同じ「語学」というカテゴリーに属していても、学習者の背景（母語、学習動機、生活環境）が異なることで、授業に求める「実践性」や「サポート」の焦点が大きく変化することがわかります。

日本人の学生が学ぶ外国語：主に異文化理解や自己成長のためのツールとしての語学力を重視し、「失敗を恐れず挑戦できる場」や「飽きさせない工夫」が求められます。

日本人以外の学生が学ぶ日本語：日本での生活や学業、キャリアに直結する必須スキルとしての日本語力を重視し、より実用的なコミュニケーション能力の向上と、複雑な日本語のルールへのきめ細やかな説明、そして生活面への配慮が求められます。

どちらのケースも、教員の熱意と丁寧なサポート、そして学生が安心して発言できる環境は共通して重要ですが、その具体的な提供方法や強調すべきポイントには違いがあると言えるでしょう。

3.2.3. 基礎科目

(1)基礎科目（文系）の良かった点と改善点のまとめ

プロンプト：「基礎科目（文系）」で授業を受けて良かった点と改善したほうが良い点の自由記述をまとめると、学生にはどのような「基礎科目（文系）」の授業を求められていますか。

「基礎科目（文系）」の授業に関する学生のコメントを総合すると、学生が求めているのは、多様な視点と深い思考を促し、学生が主体的に参加できるような、魅力的で分かりやすい学習体験だと言えます。

学生が求める「基礎科目（文系）」の授業像

「基礎科目（文系）」は、その特性上、複数の分野や教員が関わるが多く、学生は専門分野へ進む前の「導入」として、幅広い知識と思考力を養うことを期待しています。学生のコメントからは、以下の3つの柱を持つ授業が強く求められていることが分かります。

1. 視野を広げ、深い思考を促す、多様で実践的な学び

学生は、多角的な視点から物事を捉え、自らの思考を深める機会を強く求めています。

多角的な視点からの学びの提供：オムニバス形式などで様々な分野の専門家から話を聞き、多様な学問領域や社会問題を広い視野で捉えられる授業が評価されます。これまで触れたことのない分野や視点に触れることで、知的好奇心が刺激されます。

ディスカッションを通じた思考力の深化：活発なグループディスカッションを重視し、異なる意見を持つ学生と議論することで、自分の考えを深め、論理的に伝える力を養う機会が求められています。これは、単純な知識の暗記に留まらない、大学ならではの深い学びへと繋がります。

身近なテーマからの導入と現実への応用：日常や社会の具体的な問題を取り上げ、それらを社会科学的・人文科学的な視点から考察することで、学んだ知識を現実世界に結びつけ、主体的に考える力を養う授業が望まれます。

2. 学生が安心して主体的に参加できる、支援的な学習環境

学生が授業に積極的に関わり、自らの学びを深めるためには、心理的・物理的に安心して参加できる環境が不可欠です。

積極的な参加を促す雰囲気：教員が学生の発言を尊重し、安心して意見を述べられる雰囲気を醸成することが重要です。少人数であればより深い議論が期待され、大人数の場合は席替えなどで多様な交流を促す工夫が有効です。

教員の熱意と丁寧なサポート：教員が授業内容に対して熱意を持ち、分かりやすい言葉や具体例で説明する姿勢は、学生の学習意欲を高めます。また、学生からの質問に丁寧に答え、彼らの疑問を解消するサポートも重要です。

円滑なコミュニケーションの確保：マイクの音質改善や、学生からの質問を受け付ける仕組み（例：匿名質問フォーム）の導入など、円滑な双方向のコミュニケーションを可能にする環境が求められます。

3. 効果的かつ負担の少ない、明確な授業運営

学びの質を維持しつつ、学生が無理なく学習を継続できるよう、透明性と効率性が重視されます。

質の高い教材とアクセスのしやすさ：分かりやすく整理されたレジュメやスライドが、授業前または同時に提供され、オンデマンド配信などでいつでも復習できる環境が求められます。特に専門用語や英語のスライドには、丁寧な解説や日本語訳が必要です。

適切な課題量と明確な評価基準：学びに繋がる課題は歓迎されるものの、他の授業との兼ね合いを考慮した適切な量と頻度が望まれます。また、小テストやレポートの評価基準や目的、実施時期が事前に明確に示されることで、学生は安心して学習に取り組むことができます。

教員間の連携と一貫性：オムニバス形式の場合、教員間で授業の進め方や課題、評価基準に関する連携が取れていると、学生の混乱を防ぎ、一貫した学習体験を提供できます。

総じて、「基礎科目（文系）」の授業には、学生が受動的ではなく主体的に、多様な知識と考え方を吸収し、それを自身の思考へと繋げていけるような、魅力的で丁寧なガイダンスが求められていると言えるでしょう。

(2)基礎科目（数学）の良かった点と改善点のまとめ

プロンプト：「基礎科目（数学）」の授業を受けて良かった点と改善点をまとめると、学生にどのような授業が求められていることがわかりますか？

ご提供いただいた大量の自由記述コメントを総合すると、「基礎科目（数学）」において学生が求めている授業の全体像が明確に見えてきます。

「良かった点」と「改善点」をまとめると、学生は単に内容が「わかりやすい」というだけでなく、抽象的な数学の概念を確実に身につけるための具体的な仕組みと、学習者の努力を支える丁寧なサポートが両立した授業を強く求めていることがわかります。

以下に、学生が求める数学の授業の3つの特徴をまとめました。

1. 「学び」を促進する丁寧な授業設計

学生は、単に情報を受け取るだけでなく、自ら考え、手を動かして理解を深められる授業を求めています。

理論と実践の最適なバランス：抽象的な定理や証明をただ羅列するだけでなく、具体的な例題

や演習を豊富に取り入れ、「なぜこの概念を学ぶのか」という目的を明確にすることが重要です。これにより、学生は単なる暗記ではなく、数学の本質的な理解を深めることができます。

学生の理解に合わせたペース配分：多くの学生が「板書が早すぎる」「内容が難しすぎる」と不満を感じています。学生の習熟度を確認しながら、必要に応じてペースを調整したり、重要な部分を繰り返し説明したりする配慮が求められています。

物理的なアクセシビリティの確保：字が小さかったり、声が聞き取りにくかったりすると、学生は学習に集中できません。見やすい板書やマイクの活用など、物理的な環境への配慮が、学習の前提として不可欠です。

2. 確実な「定着」を促す学習サイクル

数学の学習では、反復練習とフィードバックが不可欠です。学生は、そのための仕組みが授業に組み込まれていることを高く評価しています。

計画的な予習・復習の機会：予習動画や毎週のレポート課題など、授業外での学習を促す仕組みは、学生が自律的に学習を進める上で非常に有効です。課題の量や難易度が「適切」であることも重要です。

タイムリーなフィードバック：提出された課題や小テストに対して、丁寧な添削や解説が行われると、学生は自身の理解度を確認し、次の学習へ活かすことができます。単に点数を返すだけでなく、「なぜ間違ったのか」を伝えることが、深い学びに繋がります。

多様で公正な評価方法：期末試験一発勝負ではなく、課題や中間テストを含む多様な評価方法を設けることで、学生は日々の学習に対するモチベーションを維持できます。また、評価基準を明確に提示することは、学生の不安を軽減し、公正な授業運営への信頼を築きます。

3. 学生に寄り添う「支援的」な環境

教員の姿勢や授業運営は、学生の学習意欲に大きな影響を与えます。

質問しやすい雰囲気：授業中の質疑応答や、授業外での質問に親身に対応する姿勢は、学生の疑問解消を助け、安心して学べる環境を提供します。

柔軟な情報共有：授業スライドや板書をオンラインで共有したり、授業の録画を配信したりすることは、学生が自分のペースで復習できるだけでなく、体調不良などで欠席した場合でも学習の遅れを取り戻す助けになります。

教員としての信頼性：の遅刻や休講連絡の不備、不適切な発言は、教員への信頼を損ない、授業全体の質が低いと感じさせる原因となります。学生は、教員が責任感を持って授業に臨むことを求めています。

この3つの特徴を備えた授業は、たとえ内容が難しいものであっても、学生の学習意欲を引き出し、確実な成長を促すことができると考えられます。

(3)基礎科目（理科）の良かった点と改善点のまとめ

プロンプト：「基礎科目（理科）」の化学、生物学、地球惑星科学、物理学の授業を受けて良かった点と改善点をまとめると、「基礎科目（理科）」では学生にどのような授業が求められていることがわかりますか？

「基礎科目（理科）」では、学生の「興味」「理解」「定着」を包括的にサポートする、以下の3つの柱に基づいた授業が求められていることがわかります。

単に専門知識を伝えるだけでなく、学生が自律的に学びを深められるような「学びの場」としての総合的な環境が重視されていると言えます。

1. 「学びの入り口」を広げる授業設計

学生は、自身の高校での履修状況にかかわらず、誰もがスムーズに学びに着手できるような配慮を求めています。

初学者への徹底的な配慮：「物理選択者には難易度が高い」「地学を学んでいなかった人には難しすぎる」といった声は、前提知識がない学生が置き去りにされている現状を示しています。誰もが理解できるような基礎からの丁寧な説明や、専門用語の定義を明確にすることが強く求められています。

情報伝達の最適化：「声が聞き取りにくい」「話すスピードが速すぎる」という指摘が全科目で共通して見られました。明瞭な話し方や、見やすい板書・スライド、そしてマイクなどの音響設備を適切に利用することが、円滑な情報伝達の第一歩として不可欠です。

魅力的な授業内容：一方的に知識を羅列するのではなく、「身近な事例」や「学問の本質」に触れることで、学生の知的好奇心を引き出し、「眠くならない」授業が求められています。

2. 「学びのサイクル」を確立する学習サポート

授業で得た知識を確実に身につけ、自力で復習できるような仕組みが重要視されています。

資料の共有：「スライドを Moodle に上げてほしい」「資料がすぐに削除される」という不満は、学生が授業後も自習できる環境を求めていることを示しています。予習や復習を助けるため、オンラインでの授業資料共有は必須と言えるでしょう。

演習とフィードバック：「演習問題が少ない」「小テストの解答や解説がない」という声は、アウトプットの機会と、その結果を確認するフィードバックが不足していることを示しています。適切な量の課題と、それに対する迅速かつ丁寧な解説が、学習の定着を促します。

課題の透明性と公平性：「レポートの採点基準が不明瞭」「課題に不備が多い」といった指摘は、評価方法への不信感につながっています。課題の目的、難易度、そして採点基準を明確にすることで、学生は安心して学習に取り組むことができます。

3. 「学びの場」としての環境づくり

学生は、教員や他の学生との間で、安心して学びを追求できる開かれた環境を求めています。

教員とのコミュニケーション：一方通行の授業ではなく、「質問がしやすい雰囲気」や、質問への丁寧な対応が求められています。また、学生がどのような点でつまづいているか、教員が把握する機会も重要です。

運営ルールの明確化：「出席確認方法が不公平」「評価方法の告知が遅い」といった不満は、授業の運営ルールが明確でないことへの懸念を示しています。学生が安心して授業に臨めるよう、評価基準や出席確認方法を事前に、かつ分かりやすく提示することが求められます。

これらのことから、学生に求められているのは、単に内容が「わかりやすい」ことだけではありません。教員の情熱が伝わり、学びのハードルが低く、その後の学習を継続できるような総合的なサポート体制が構築された授業であると言えます。

プロンプト：「基礎科目（理科）」の「化学」、「生物学」、「地球惑星科学」、「物理学」では、授業を受けて良かった点と改善したほうが良い点の自由記述から、学生が求める授業に違いはありますか。

これまでの分析から、学生が求める授業像には科目間で多くの共通点がある一方で、それぞれの科目の特性や学生の背景に起因する独自のニーズも存在することがわかります。

共通して求められているのは、以下の点です。

初学者への配慮：高校でその科目を履修していなかった学生でも理解できる、丁寧な説明。

情報伝達の質：明瞭な声、適切なスピード、見やすい資料。

手厚い学習サポート：課題の解答や解説、テストのフィードバック、予習・復習のための資料共有。

これらの共通基盤の上に、各科目ならではの要望が見られました。

科目ごとの独自のニーズ

化学

化学では、評価方法の透明性と細部への言及が際立っていました。「レポートの採点基準が分からない」「グラフの書き方を事前に明記してほしい」といった具体的な不満が多く、単に評価方法を知りたいだけでなく、そのルールや基準の妥当性に対する関心が非常に高いことがうかがえます。

生物学

生物学では、受講者層への対応が大きな課題となっています。「生物選択者には簡単すぎ

る」「物理選択者には難しすぎる」という両極端な意見が見られ、受講者間の知識レベルの差をどのように埋めるかが求められています。また、一部の教員に対するハラスメント的な言動への厳しい指摘も、他の科目にはあまり見られない特徴でした。

地球惑星科学

この科目では、視覚的な要素への要望が目立ちました。「実物の化石を持ってくる」「映像資料も見てみたい」といった意見があり、抽象的な概念を扱うことが多いからこそ、視覚や体験を通して具体的にイメージできる授業が求められていると言えます。

物理学

理学では、数学的背景への配慮と課題の質に対する不満が特に顕著でした。「微分積分が当たり前のように使われていて理解できない」という声が多く、大学の数学カリキュラムとの連携が求められています。また、「宿題やテストの問題に不備が多い」という指摘は、単なる難易度だけでなく、出題そのものの正確性を強く意識していることがわかります。

まとめ

総じて、学生はどの科目でも「わかりやすい丁寧な授業」を求めています、その「わかりやすさ」の定義は科目によって少しずつ異なります。

化学では評価の公平性と透明性

生物学では多様な受講者層への対応

地球惑星科学では視覚を通した具体的な学び

物理学では数学的な背景への配慮と問題の質

これらが、それぞれの科目で特に重要視されている、学生独自のニーズと言えるでしょう。

3.2.4. 教養科目 主題別科目

(1)教養科目 主題別科目の良かった点

プロンプト：授業を受けて良かった点についてのまとめも伺ってよろしいですか？

「教養科目 主題別科目」授業を受けて良かった点：科目群ごとの特徴

学生が「良かった」と感じた点は、各科目群の特性と密接に関連していることがわかります。

1. 科学・技術の世界

この科目群では、科学技術への関心の喚起と基礎知識の習得が中心的な評価点です。

科学技術への興味と理解：難解なテーマでも分かりやすい説明や具体例を通して、科学技術への興味が喚起され、仕組みや概念を理解できた点が評価されています。特に、これまで触れる機会が少なかった分野（半導体、ロボット工学など）の基礎を学べたことに価値を感じています。

思考力の育成：論理的思考や批判的思考を養う機会（映像資料の批判的検討など）が提供され、単なる知識の習得に留まらない学びがあったという声もあります。

丁寧な授業運営：授業資料の充実や Moodle での提供、課題へのフィードバックなどが、学習の助けになったと評価されています。

2. 芸術と文学

この科目群では、感性の育成と教養の深化、そして文化的体験への満足度が高いです。

新たな発見と感性の刺激：文学作品や芸術（映画、音楽、尺八など）に触れることで、新たな発見があったり、感性が刺激されたりした点が評価されています。これまで知らなかった文化や表現に触れる喜びが大きいです。

教養の深化と自己表現：芸術や文学を通じて教養が深まり、自己表現の新たな方法を学ぶことができたという意見も見られます。

実践的な学びと交流：合唱や尺八などの実技を通じて、実践的に芸術に触れることができた点や、他の学生との交流ができたことも評価されています。

3. 思索と言語

この科目群では、深い思考と知的好奇心の刺激、そして言語に対する新たな視点が評価されています。

知的好奇心の刺激と深い思考：哲学や言語学といった分野を通じて、知的好奇心が刺激され、物事を深く考える習慣や、多角的な視点を得られた点が特に高く評価されています。

学術的な分析力の向上：論文読解や議論を通じて、複雑な概念を分析し、理解する能力が養われたという声が見られます。

言語への理解と応用の可能性：言語の成り立ちや文化との関連を学ぶことで、言語に対する新たな認識が深まり、それが他の学習やコミュニケーションに応用できると感じている学生もいます。

4. 社会の認識

この科目群では、社会や多様な価値観への理解、そして思考力の育成が主な評価点です。

多角的な視点と社会理解：多様な学説や視点に触れることで、社会や事象に対する理解が深まり、新たな物の見方や問題意識を持つことができた点が評価されています。特に、既存の知識を批判的に見つめ直す機会が価値あるものとされています。

論理的思考力と議論の促進：哲学的な思考や議論を通じて、論理的に物事を考える力、自らの意見を形成する力を養えたという声が多く、活発な意見交換の場が評価されています。

現代社会との関連性：講義内容が現代社会の問題や日常生活と結びついており、具体的な事例を通して学ぶことで、身近な問題への理解が深まったという意見も多く見られます。

5. 歴史の視座

この科目群では、新たな視点や専門的な学習機会への評価が際立っています。

新たな視点と深い理解：これまで触れたことのない地域史やテーマ（北海道・樺太の歴史、奴隷制、家族制度など）を通じて、歴史を多角的に捉え、深い理解や新たな思考法を身につけられた点が非常に高く評価されています。

学術的スキルの向上：論文指導やレポート作成、文献調査の方法について丁寧な指導があり、実践的なフィードバックを受けることで、学術的な文章作成能力や調査能力が向上したという声が多く見られます。

具体的な資料と臨場感：映像資料、現地写真、史料などが豊富に用いられ、授業内容の理解を深め、臨場感を持って学習できたことが評価されています。

このように、各科目群はそれぞれ異なる角度から学生の学びを豊かにし、知的な満足感を提供していることがうかがえます。

プロンプト：「教養科目 主題別科目」の「科学・技術の世界」「芸術と文学」「思索と言語」「社会の認識」「歴史の視座」の自由記述で挙げられていた授業を受けて良かった点で、5つすべての科目群で共通していることは何ですか？

これまでの分析から、「教養科目 主題別科目」の全科目群に共通して学生が価値を感じている点は、以下の2つに集約されます。

5 科目群共通の「良かった点」

知的好奇心の刺激と新たな視点の獲得

どの科目群でも、「知的好奇心が刺激された」「新たな視点が得られた」「物事を多角的に捉えられるようになった」といったコメントが共通して見られました。学生たちは、自身の専門分野とは異なる領域や、これまで知らなかった知識、考え方に触れることで、視野が広がり、知的な満足感を得ているようです。

論理的思考力や批判的思考力の向上

単に知識を習得するだけでなく、「論理的に物事を考える力が養われた」「批判的思考ができるようになった」といった、思考力の向上を挙げる声も共通していました。各科目群の特性に応じた形で、学生自身が深く考え、分析し、意見を形成する機会が提供され、それが彼らの学習能力の向上につながっていると感じられているようです。

これらの共通点は、教養科目としての「主題別科目」が、学生の知的好奇心を刺激し、思考力を育むという重要な役割を果たしていることを示しています。

(2)教養科目 主題別科目の改善点

プロンプト：「教養科目 主題別科目」の「科学・技術の世界」「芸術と文学」「思索と言語」「社会の認識」「歴史の視座」の自由記述で挙げられていた改善点で、科目群による違いは何ですか？

これまでの分類結果を踏まえ、各科目群の特性と学生のニーズがどのように改善点に反映されているか、その違いを明確にまとめてみました。

科目群ごとの改善点の違い

「教養科目 主題別科目」の各科目群では、それぞれ異なる性質の授業内容や学習スタイルに応じて、特徴的な改善点が挙げられています。

1. 科学・技術の世界

この科目群では、内容の難易度と専門性に関する改善点が最も顕著です。

難解な内容と前提知識の不足：「話の内容がとても難しい」「理系の知識がないとついていけない」「初めて聞く言葉を普通に使ってくる」など、特に文系学生から、授業内容が専門的すぎるとの声が多く、基礎知識の解説や専門用語の丁寧な説明が求められています。

実践・体験機会の不足：「実際に回路に触れる時間がもう少しあると良い」「実験系をもっと前半にも行う」といった、座学だけでなく具体的な体験を通じた理解促進への要望も見られます。

事務手続きの明確化：「評価方法や遅刻の扱いの説明が二転三転して混乱した」「予習課題の

問いを明瞭にしてほしい」など、授業運営のルールや課題提示の明確さに関する指摘も散見されます。

2. 芸術と文学

この科目群では、教員の伝え方や授業の質、そして実技指導への配慮が主な改善点として挙げられます。

情報伝達と分かりやすさ：「話し方が分かりづらい」「話の展開の仕方が予想しづらい」など、内容そのものよりも、教員の話し方や授業構成が分かりにくいという声が目立ちます。

多様な学習スタイルへの対応：「学生どうして議論する機会がもっとほしい」という意見がある一方で、合唱や尺八などの実技科目においては、「音符が読めない」「音程を確認しきれていない」など、個々のスキルレベルに合わせた丁寧な指導やケアの不足が指摘されています。

教材の視覚的品質：「白黒印刷で見にくい」「レジュメが英語表記のみ」など、芸術作品や映像資料を扱う特性上、視覚情報が正確に伝わるかどうか重視されています。

3. 思索と言語

この科目群は、内容の抽象性と教員の姿勢・コミュニケーションに関する改善点が特徴的です。

抽象概念の理解促進：「話の後半は内容を理解しづらく付いていけない」「抽象的な内容が難しかった」など、哲学や言語学といった抽象度の高い内容を、より具体的に、学生が理解しやすいように説明することへの要望が強いです。

教員の姿勢と信頼関係：「単位をチラつかせ学生を抑圧している」「先生の主観が強い」「学生と教師は分かり合えないといった趣旨の話を毎回する」など、教員の言動や姿勢が学生の学習意欲や授業への信頼感に影響を与えているという、心理的な側面からの指摘が見られます。

課題の負担とフィードバック：「毎週レポート書くのきつい」「フィードバックが欲しかった」など、レポートの量や頻度、そしてフィードバックの不足も共通の課題です。

4. 社会の認識

この科目群では、評価の公平性と大人数授業における学生の参加機会に関する改善点が目立ちます。

評価の公平性：「授業に来ていない学生と来ている学生の間に優劣がつかない」「発言者が運で選ばれる」など、特に大人数授業での出席や発言が成績に適切に反映されていないことへの不満が集中しています。不正防止策の甘さも指摘されています。

ディスカッションの量と質：「話し合いが多すぎた」という意見と「もっとディスカッションの時間を設けてほしい」という意見が混在しており、ディスカッションの目的や質の最適化が課題です。

教員の言葉遣い：「先生の言葉がたまに学生を傷つけそうだった」など、教員の言葉選びに対

する配慮を求める声もあります。

5. 歴史の視座

この科目群は、教員の日本語能力と、歴史未履修者への配慮が特徴的な改善点として挙げられます。

教員の日本語能力：「日本語が聞き取りづらい」「先生の日本語がよく伝わらない」など、教員の言語能力が授業理解に直接影響しているという指摘が多く見られます。

未履修者への配慮：「日本史未履修者にとっても厳しい授業内容だった」というように、高校までの学習内容を前提とせず、基礎的な部分からの丁寧な解説が求められています。

出席要件の厳しさ：「病欠を認めてほしい」「一回の欠席につき10点の減点は度を越している」など、他の科目群と比較して出席に関する評価が厳しいと感じている学生が多いです。

まとめ

各科目群はそれぞれの学問分野や授業形態（座学中心か、実技を含むか、人数規模など）の特性に応じて、学生が求める改善点が異なっていることが明らかになりました。

プロンプト：「教養科目 主題別科目」の「社会の認識」「歴史の視座」「科学・技術の世界」「芸術と文学」「思索と言語」の自由記述で挙げられていた改善点で、5つすべての科目群で共通していることは何ですか？

「社会の認識」「歴史の視座」「科学・技術の世界」「芸術と文学」「思索と言語」のすべての科目群の改善点を改めて確認したところ、大きく以下の2点が共通して挙げられています。

5 科目群共通の改善点

授業内容の説明の分かりやすさや難易度調整に関する要望

多くの科目で、「話す内容が難しい」「説明がわかりづらい」といった、授業内容の難易度や教員の説明方法に対する課題が指摘されています。特に、初学者や異なる専門分野の学生が理解できるよう、より丁寧な解説や具体的な例示、ペース配分の調整が求められています。

授業資料の提供方法と視認性に関する要望

各科目で共通して、「スライドが見にくい」「配布資料が不十分」「Moodle への資料アップロードがない/不十分」といった、授業資料の質や提供方法に関する改善点が挙げられています。学生は、復習のしやすさや、視覚的な情報の分かりやすさを重視しており、資料の Moodle 掲載やカラー印刷、ページ番号の付与などが求められています。

これらの点は、科目分野を問わず、学生が授業を理解し、効率的に学習を進める上で重要だと考えている共通の課題と言えるでしょう。

3.2.5. 教養科目 総合科目

(1)教養科目 総合科目の良かった点と改善点のまとめ

プロンプト：「教養科目 総合科目」の授業を受けて良かった点と改善点をまとめると、学生にどのような授業が求められていることがわかりますか？

「教養科目 総合科目」で学生に求められる授業とは

「教養科目 総合科目」は、多様な専門分野の教員がそれぞれの知見を提供するオムニバス形式が特徴です。学生のコメントを総合すると、この科目群で求められているのは、知的好奇心を刺激し、視野を広げ、実践的な思考力を養い、かつ、学生に寄り添った学習環境が提供される授業だと言えます。

具体的には、以下の3つの要素が特に重要です。

1. 多様な視点と深い学びを提供する魅力的なコンテンツ

学生は、自身の専門外の分野に触れることで、新たな知的好奇心を刺激され、視野が広がることを強く求めています。

学際的な内容と新たな気づき：さまざまな分野の専門家から話を聞くことで、これまで知らなかった事柄や、異なる視点からのアプローチに触れる機会が非常に高く評価されています。これにより、物事を多角的に捉え、深い理解を得られることが期待されます。

実践的・現実世界との関連性：講義内容が現代社会の問題や将来のキャリアと結びついていること、また、社会で活躍するOB/OGや外部講師の具体的な経験談は、学生にとって学習の動機付けとなり、現実的な視点を得る上で重要です。

分かりやすく魅力的な説明：オムニバス形式で多様な背景を持つ学生が受講するため、専門用語を避け、具体例や視覚資料（スライド、映像、写真）を豊富に用いるなど、初学者にも理解しやすい丁寧な説明が不可欠です。話の内容そのものが「面白い」と感じられることも、学生の集中力と学習意欲を高めます。

2. 能動的な学習と交流を促す設計

単に知識を一方的に提供するだけでなく、学生自身が主体的に考え、他者と交流する機会が求められています。

思考力・実践的スキルの育成：知識の習得だけでなく、論理的思考力や批判的思考力、問題解決能力を養えるような、考察や議論を促す授業設計が評価されます。グループワークやプレゼンテーションなど、アウトプットの機会も重要です。

学生間の交流と協働：異なる専門分野や文化背景を持つ学生（特に留学生）との交流は、新たな学びや自身の見識を深める貴重な機会となります。活発な意見交換を促すペアワークやグループワークは、こうした交流を促進します。

適切な課題とフィードバック：学習内容の定着を促すための課題は必要ですが、その量や形式

は学生の負担を考慮し、適切に設定されるべきです。また、課題に対する個別かつ丁寧なフィードバックは、学生が自身の成長を実感し、次へとつなげる上で不可欠です。

3. 学生に寄り添う一貫した授業運営と学習環境

多様な教員が担当するからこそ、学生が安心して学習に取り組めるよう、一貫性のあるサポート体制が求められています。

明確で統一されたルール：出席確認方法、課題の提出形式、文字数制限、評価基準など、授業に関する基本的なルールは、教員間で統一され、学生に明確に周知される必要があります。これにより、学生は混乱なく学習に集中できます。

アクセシブルな学習資料：授業で使用したスライドやレジュメは、Moodleなどのオンラインプラットフォームで常時閲覧・ダウンロード可能にすることが強く求められています。これにより、学生は自身のペースで復習ができ、授業での聞き漏らしや理解不足を補うことができます。

快適な学習環境：物理的な教室環境（座席からの視認性、Wi-Fi環境など）はもちろん、教員の言葉遣いや学生への配慮（特定の画像表示への注意、質問への丁寧な対応など）も、学生が心理的に安心して学習に取り組めるかどうかに影響します。

以上のことから、「教養科目 総合科目」では、学生の知的な刺激と成長を促し、多様な背景を持つ学生が安心して学び、交流できるような、質と配慮の行き届いた授業設計と運営が求められていると言えるでしょう。

3.2.6. 教養科目 共通科目

教養科目 共通科目には、情報学、統計学、体育学の3科目が含まれる。それぞれの科目の特徴があるとみられるため、科目ごとに検討した。

(1)情報学の良かった点と改善点のまとめ

プロンプト：「情報学」の良かった点と改善点をまとめると、学生はどのような授業を求めていますか。

「情報学」の授業で学生が求めているのは、実践的でわかりやすい学びを、適切なサポートと効率的な運営のもとで提供される授業だと言えます。

「良かった点」と「改善点」を総合すると、学生が「情報学」の授業に期待する要素は以下の3つの柱に集約されます。

「情報学」で学生に求められる授業とは

1. 初学者に寄り添った、実践的で段階的な知識・スキル習得の機会

多くの学生が情報学を初めて学ぶため、専門知識の有無にかかわらず、誰もが確実にスキルを身につけられるような配慮が求められています。

基礎からの丁寧な導入と、段階的な学習：Pythonのようなプログラミング言語や情報倫理など、新しい概念を学ぶ際には、基礎をしっかり固め、徐々に難易度を上げていくような授業設計が重要です。初学者が置いてきぼりにならないよう、専門用語の丁寧な解説や、豊富な具体例の提示が求められます。

実践的かつ応用可能なスキルの習得：大学生活や将来のキャリアで直接役立つスキル（プログラミング、レポート作成、情報倫理、PC操作など）を、単なる知識としてではなく、実際に手を動かして習得できる機会が非常に重視されます。

モチベーションを維持する工夫：毎週の小テストや課題、補習制度、ゲーム感覚で取り組める演習システムなどは、学生が自身の成長を実感し、学習意欲を維持するために有効な手段として評価されています。

2. 学習効果を最大化する、手厚い個別サポートと適切なフィードバック

情報学は、学生の習熟度に個人差が出やすいため、それぞれの学生が抱える疑問や困難に対し、きめ細やかなサポートと適切なフィードバックが不可欠です。

迅速かつ丁寧な質問対応：わからないことがあった際に、すぐに教員やTA（ティーチングアシスタント）に質問でき、的確な回答が得られる環境が強く求められています。特に大人数で学ぶ科目だからこそ、手厚いサポート体制は学生の学習における安心感に繋がります。

明確な評価基準と具体的なフィードバック：課題の目的や評価基準が事前に明確に示され、提出した課題に対して具体的なフィードバックがあることで、学生は自身の理解度を確認し、次

の学習に活かすことができます。単なる点数だけでなく、どこをどう改善すれば良いのかが分かる情報が求められています。

個別学習への配慮：自身のペースで学習を進められる教材の提供（スライド、復習用テストなど）や、苦手な部分を克服するための補習課題などは、個々の学生の学習スタイルやレベルに応じた柔軟な対応として歓迎されます。

3. 学生の負担を考慮した、効率的で一貫性のある授業運営

多忙な学生生活の中で、無理なく学習を継続できるよう、授業の進行、課題量、および使用するシステムにおいて、効率性と一貫性が求められています。

適切な課題量と配分：授業時間外の課題量が過剰にならないよう、他の科目との兼ね合いを考慮した適切な量と、学期全体を通じた均等な配分が求められます。課題の重複を避け、効率的な学習に繋がるよう工夫が必要です。

授業内での完結性とその意義の明確化：可能な限り授業内で課題を完結できる時間配分や、グループワークを行う場合はその意義と具体的な進め方を明確にし、学生の負担を軽減する工夫が求められます。授業時間外の活動は、その必要性を学生が納得できる形で導入されるべきです。

統一された情報提供と安定した学習環境：複数の教員が担当する場合でも、課題提出方法、資料提供方法、評価基準など、基本的な運営ルールは統一し、混乱を避けることが重要です。また、音声トラブルやシステムの不具合がない、安定したオンライン・オフラインの学習環境の提供も不可欠です。

結論として、「情報学」の授業においては、学生が現代社会で必要とされる情報リテラシーやITスキルを、各自のレベルに合わせて着実に習得できるような、丁寧で実践的な指導と、それを支える手厚いサポート、そして学生の状況を考慮した無理のない授業設計が強く求められていると言えるでしょう。

(2)統計学の良かった点と改善点のまとめ

プロンプト：「統計学」の良かった点と改善点をまとめると、学生はどのような授業を求めていますか。

「統計学」の授業について、「良かった点」と「改善点」をまとめると、学生は複雑な内容を分かりやすく、実践的に学び、誰もが確かな知識を習得できるよう、教員の熱意ある工夫と一貫性のあるサポートが提供される授業を求めていることが分かります。

「統計学」で学生に求められる授業とは

学生のコメントを総合すると、統計学の授業に期待されるのは以下の3つの柱に集約されます。

1. 初学者に寄り添った、丁寧で実践的な知識習得の機会

統計学は多くの学生にとって新しい分野であり、苦手意識を持つ人も少なくありません。そのため、専門知識の有無にかかわらず、誰もが確実に理解を深められるような配慮が強く求められています。

基礎からの丁寧な解説と具体例：抽象的な数式や概念を、身近な例や分かりやすい言葉で噛み砕いて説明し、視覚的な資料も活用することで、学生が「分かった！」と実感できる授業が評価されます。

豊富な演習と実践機会：授業中に練習問題を解く時間を設けたり、毎週適切な量の課題を出したりすることで、学んだ知識をすぐに実践し、定着させられる仕組みが重要です。解説付きの解答例提供も、自学自習の大きな助けとなります。

知識の応用性への言及：単なる計算方法だけでなく、統計学が日常生活や他の学問分野でどのように活用されているかを示すことで、学生は学ぶ意義を見出しやすくなります。

2. 学習効果を最大化する、効率的かつ一貫性のある授業運営

多忙な学生生活の中で、ストレスなく学習に集中できるよう、授業の進行、教材の提供、そして評価方法において、明確さと公平性が求められています。

明確で効率的な授業進行：雑談や不必要な脱線は控え、授業内容の要点をはっきりと示し、適切なスピードで進行することが望まれています。

質の高い教材とアクセスのしやすさ：スライドやプリントは分かりやすく整理され、誤植が少なく、学生が自由に書き込んだり、いつでも復習したりできる形式での提供が重要です。

公平で透明性の高い評価：出席の取り方や、課題の提出期限、成績評価の基準が明確で、学生が安心して学習に取り組める制度設計が求められます。

3. 学生の学習意欲を高める教員との関係性

教員の熱意や学生への配慮は、難しいとされる統計学の学習意欲を大きく左右します。

教員の熱意とコミュニケーション：統計学への情熱が伝わる教員の授業は、学生の学習意欲を刺激します。また、質問に対して親身に、かつ丁寧に回答する姿勢は、学生の安心感に繋がります。

多様な学生への配慮：特定の学部や背景を持つ学生に偏ることなく、すべての履修者に対して公平な視点で接することが求められます。

結論として、「統計学」の授業においては、学生が「難しい」と感じる内容を「分かりやすい」「面白い」と感じられるように、教員が内容を工夫し、実践的な演習機会を豊富に提供す

ること。そして、学習意欲を削ぐことなく、すべての学生が公平に、ストレスなく学べるような、きめ細やかな授業運営とサポート体制が強く期待されていると言えるでしょう。

(3)統計学と統計学の類似点と相違点

プロンプト：情報学と統計学の授業を受けて良かった点、改善したほうが良い点の自由記述から、学生が求める授業に共通していることを教えていただけますか。

情報学と統計学、それぞれの授業に対する学生の自由記述のコメントから、「良かった点」と「改善したほうが良い点」を比較することで、学生がどのような授業を求めているのか、共通する要素を洗い出すことができます。

情報学と統計学の授業に共通して学生が求める要素

両科目のコメントを総合すると、学生は以下の3つの柱を持つ授業を強く求めていることが共通して見て取れます。

1. 「わかる」と「できる」を実感できる、丁寧で実践的な学習体験

学生は、単に知識を羅列するだけでなく、内容を本当に理解し、それを自分の力で実践できることを重視しています。

丁寧で分かりやすい解説：抽象的・専門的な内容であっても、具体例や図、身近な事柄に紐づけて噛み砕いて説明されることを強く求めています。「例えがわかりやすかった」「説明が丁寧だった」という点は両科目で高く評価されています。

豊富な演習と実践の機会：学んだことをすぐに試せる練習問題や演習問題が豊富に用意され、それらを授業内で解く時間があることが共通して好評です。これにより、知識の定着だけでなく、「自分でできる」という自信に繋がっています。

段階的な学習と無理のない難易度設定：特に初学者にとって、難易度が急に上がったり、前提知識を強く求められたりすることへの不満が見られます。段階的にスキルアップできるような設計や、特定の専門分野（例：生物学、数Ⅲ）の知識がない学生への配慮が求められています。

2. 学習効果を最大化する、効率的で一貫性のある授業運営

学生は、多忙な大学生活の中で、無駄なく、スムーズに学習を進められるような環境を求めています。

質の高い教材とアクセスのしやすさ：スライドやプリントが分かりやすく整理されており、Moodleなどのシステムでいつでもアクセス・復習できることが重要視されています。

適切な課題量と明確な目的：課題の量が過剰すぎず、他の授業との兼ね合いを考慮した適正な

量であること、そして「なぜこの課題をやるのか」という目的が明確であることが共通の要望です。また、課題の重複を避けることも求められています。

一貫性のある透明なルール：複数の教員が関わる場合でも、出欠確認方法や課題提出期限、評価基準が統一され、学生に明確に周知されることが非常に重要です。曖昧さや突然の変更は学生の不満に繋がります。

3. 学生の学習意欲を高める、質の高いコミュニケーションとサポート

学生は、教員が自分たちの学習状況や意見に寄り添い、積極的に関わってくれることを望んでいます。

教員の熱意とコミュニケーション：教員が授業内容に対して熱意を持ち、明るく、聞き取りやすい話し方をすることは、学生の興味を引き、学習モチベーションを高めます。適度な雑談は歓迎される一方、脱線しすぎた話や不適切な発言は避けられるべきだと考えています。

迅速で丁寧な質問対応：疑問点が生じた際に、教員やTAが親身になって丁寧に回答してくれることは、学生が安心して学習を進める上で非常に重要です。

公平で快適な学習環境：物理的な教室環境（Wi-Fi、音響、座席配置など）や、教員による学生への公平な対応（特定の学生層への偏りがないこと）も、学習に集中し、ストレスなく授業に参加するために不可欠だと考えられています。

これらの共通点から、学生は、「ただ情報を与えられる」のではなく、「自ら学び、理解し、活用できる」ようになるためのサポートと環境が整った授業を求めていると言えるでしょう。

プロンプト：情報学と統計学の授業を受けて良かった点と改善したほうが良い点の自由記述から、学生が求める授業の違いはありますか。

情報学と統計学の授業に関する学生のコメントを比較すると、共通点が多い一方で、それぞれの科目の特性上、学生が求める授業には明確な違いも見られます。

大まかに言えば、**情報学では「実践的なスキルの習得とサポートの充実」**が、**統計学では「専門的な内容の分かりやすさと深い理解への誘導」**がより強く求められている傾向があります。

以下に、学生が求める授業の主な違いを分類します。

1. 授業内容と学習目標に関する違い

項目	情報学でより強く求められること	統計学でより強く求められること
内容の方向性	広範なリテラシーと実用スキル：日常生活や将来に役立つ PC 操作、情報倫理、プログラミング（Python など）の基礎的な使い方など、汎用的な情報活用能力の習得。	専門知識の論理的な理解：複雑な統計的概念、公式、証明を論理的に理解し、その背景や意味を深く掘り下げて学ぶこと。
初学者への配慮	操作の丁寧な誘導とトラブル対応：PC 操作が苦手な学生への個別の配慮や、システムの不具合に対する迅速な対応。「できる」ようになるための手取り足取りの指導。	抽象概念の具体的な解説：数学的な背景が薄い学生（特に文系）にも理解できるよう、抽象的な内容を平易な言葉や具体例でかみ砕いて説明すること。
実践の場	ハンズオンでの演習と応用：授業時間内での PC を使った実践演習、そしてそれを日常生活に応用できるような課題。「手を動かして習得する」場。	問題解決への適用と論理的思考：公式や定理を暗記するだけでなく、それを具体的な問題に適用し、論理的に思考する力を養う演習。「考える」力を育む場。

2. 授業運営とサポートに関する違い

項目	情報学でより強く求められること	統計学でより強く求められること
課題の目的	スキル定着と作業負担の軽減：毎週の課題を通じてスキルを定着させるが、他の授業との兼ね合いを考慮した適正な量と、重複の排除。効率的な作業。	理解度確認と深い考察：計算問題で理解度を確認し、思考を深めるための問題提供。解答例の丁寧さも重視される。
グループ活動	効率的な連携と負担軽減：授業外での調整が難しいグループワークよりも、授業内での完結や、個人の裁量で進められる課題形式。人間関係のトラブル回避。	（統計学ではグループワークに関する言及が少ない）
教員の役割	実践的な指導者とトラブルシューター：操作方法の明確な指示、システムのトラブル対応、個別の疑問への迅速かつ具体的な回答。学習を円滑に進めるためのサポート役。	専門知識の深い解説者と学習モチベーター：専門知識を分かりやすく、熱意を持って伝え、学生の知的好奇心を刺激する存在。学習への興味を引き出す語り部。
評価の透明性	具体的な評価基準とフィードバック：特にレポートなどの記述課題において、何が評価され、どこを改善すべきかが明確であること。努力が報われる透明性。	試験形式と補助の明確化：テストの範囲や形式（マーク式、チートシート可など）が事前に明確で、安心して試験に臨めること。不安の軽減。

まとめ

共通して「分かりやすさ」「適切な課題量」「丁寧なサポート」が求められる中で、情報学は、PC 操作やプログラミングといった「手を動かして習得する具体的なスキル」が中心となるため、その実践的な側面のサポートや、多様な学生の IT スキルレベルへのきめ細やかな配慮がより強く求められています。学生は「これを使えるようになりたい」という具体的な成果を求めている傾向があります。

一方、統計学は、より抽象的な概念や数学的な思考を扱うため、難解な内容をいかに論理的かつ分かりやすく説明し、学生がその本質を深く理解できるかという点に重きが置かれています。学生は「これを理解したい、なぜそうなるのかを知りたい」という知的な欲求を重視する傾向があります。

どちらの科目も学生の学習意欲を高めるためには教員の熱意が重要ですが、その熱意の示し方や、学生へのサポートの焦点には違いが見られると言えるでしょう。

(4)体育学の良かった点と改善点のまとめ

プロンプト：「体育学」の良かった点と改善点をまとめると、学生はどのような授業を求めていますか。

「体育学」の授業について、「良かった点」と「改善点」をまとめると、学生は単に体を動かすだけでなく、日常生活に役立つ知識や多角的な視点を提供し、かつ、学生の多様な背景に配慮した、質の高い授業運営と学習環境が整った授業を求めていることがわかります。

「体育学」で学生に求められる授業とは

学生のコメントを総合すると、「体育学」の授業で求められているのは、以下の3つの要素が特に重要であることが明らかになります。

1. 日常生活に繋がり、知的好奇心を刺激する実践的で多角的な内容

学生は、体育を単なるスポーツ活動としてではなく、自分たちの生活や社会と結びつけて理解できるような、より深い学びを求めています。

生活に役立つ実践的な知識：睡眠、健康、身体の動かし方など、学生の日常生活に直接応用できる具体的な知識が強く求められています。これにより、学んだことが「自分ごと」として捉えられ、学習意欲が高まります。

多角的で新鮮な視点：スポーツの歴史、文化、社会との関連性、心理学的な側面など、これまで知らなかった視点から体育を学ぶことで、知的好奇心が刺激され、視野が広がることが評価されています。

魅力的な講義と参加型学習：教員の研究に基づいた興味深い話や、心理実験、アンケート、映

像などを活用した参加型の授業は、学生を飽きさせず、能動的な学習を促します。

2. 多様な学生層に配慮した、丁寧で分かりやすい指導

「体育学」は、文系・理系問わず多様な専門分野の学生が履修するため、それぞれの学生が無理なく理解できるよう、きめ細やかな配慮が求められます。

基礎からの丁寧な解説：生物学的な内容や専門用語が出てくる際には、文系学生など特定の知識を持たない学生にも理解できるよう、基礎的な説明を加え、分かりやすさを追求する必要があります。

一貫性のある情報提供とペース配分：複数の教員が担当する場合でも、話の要点が明確で、授業のテンポが適切であることが求められます。また、スライドや資料は分かりやすく、いつでもアクセスできる形で提供されることで、学生は自身のペースで復習できます。

3. ストレスなく学習できる、快適で効率的な授業運営と環境

学生は、学習内容に集中できるよう、授業運営の効率性や物理的な学習環境の質にも注目しています。

明確で統一された運営ルール：出欠確認方法、課題の提出期限、評価基準などは、教員間で統一され、学生に分かりやすく周知される必要があります。特に課題の提出期限は、学生の多忙なスケジュールを考慮し、分かりやすい設定が求められます。

適切な課題量と配分：他の授業との兼ね合いも考慮し、無理のない課題量と、学期全体を通じた均等な配分が重要です。過度な負担は、学生の学習意欲を低下させる原因となります。

質の高い学習環境：Wi-Fi 環境の安定性、音響設備、教室の広さなど、授業に集中できる物理的な環境が整っていることが求められます。

以上のことから、「体育学」の授業は、学生の日常生活に根ざした知的な探求と、その学びを支えるきめ細やかな指導、そして学生に寄り添った効率的な運営が求められていると言えるでしょう。

3.2.7. 教養科目 一般教育演習（フレッシュマン・セミナー）

(1)一般教育演習（フレッシュマン・セミナー）の良かった点と改善点のまとめ

プロンプト：「一般教育演習（フレッシュマン・セミナー）」では学生にどのような授業が求められていますか？

「一般教育演習（フレッシュマン・セミナー）」の学生の自由記述を総合すると、学生がこの科目に求めているのは、「主体的な学び」と「それを支える安心できるサポート」の両立です。これは、以下の3つの側面から見えてきます。

実践の場としての学び

学生は、座学中心の他の授業とは異なり、自ら手を動かして学ぶ体験的な活動を求めています。

強み：フィールドワーク、研究室見学、シミュレーション、ゲーム制作といった活動が、学問分野への興味を深め、将来のキャリアを考える貴重なきっかけとなっています。

課題：一方で、活動の量やスケジュールが過剰になり、「作業量が多すぎる」と感じられると、学ぶ意欲が削がれてしまいます。学生は、単に忙しいだけでなく、学びに繋がる適度な負担と時間の配分を求めています。

総合的なスキルの習得と成長

学生は、この科目群に、将来の学業やキャリアに役立つ普遍的なスキルを身につける場としての役割を期待しています。

強み：レポートや論文の書き方、プレゼンテーション能力、論理的思考力など、大学生活の基礎となるスキルを習得できる点が評価されています。

課題：課題の目的や評価基準が不明瞭だと、何をすればよいか戸惑ってしまいます。また、高校で未履修の分野の専門的な内容が難しすぎると感じる場合もあり、学生の知識レベルに合わせた配慮が求められています。

安心して学べるサポート体制

学生が自由で主体的に学ぶためには、それを支える丁寧なサポートが不可欠だと感じています。

強み：教員の教育に対する熱意や、一人ひとりへのきめ細かなフィードバックが、学生の学びを強く後押ししています。また、留学生や他学部の学生との交流は、視野を広げる重要な機会となっています。

課題：運営面での不透明さ（例：忙しい時期や授業外の活動量に関する情報不足）や、学生間の学習意欲の格差が、一部の学生に負担をかける要因となっています。安心して学びに取り組めるよう、事前の情報共有や公平な運営が求められています。

3.2.8. オムニバス授業について

(1) 学生が受けて良かったと感じるオムニバス授業

プロンプト：これまでに「教養科目 主題別科目」「教養科目 総合科目」「情報学」「統計学」「体育学」「日本語に関する科目」「外国語科目」「外国語演習」「基礎科目（文系）」の自由記述を分類していただきました。それらすべての自由記述から、学生が受けて良かったと感じるオムニバス授業がどのようなものか、教えていただくことはできますか？

※「基礎科目」、「教養科目 一般教育演習」は本分析に含めていない。

学生が「受けて良かった」と感じるオムニバス授業の共通特徴

学生の膨大な自由記述コメントを総合すると、高く評価されるオムニバス授業は、単に複数の教員が担当するだけでなく、多様な専門性を持つ教員が連携し、学生の知的好奇心を最大限に刺激しながら、主体的な学びを深める機会を提供し、かつ、安心して挑戦できる支援的な環境が整った授業であると言えます。具体的には、以下の5つの要素が揃っている授業が、学生に「受けて良かった」と強く記憶されています。

1. 知的な視野を広げ、深い洞察を促す「多様な知と学際性」

オムニバス授業の最大の強みは、一人の教員では提供できない学際的かつ多角的な視点を学生に提供できる点にあります。学生は、これまで知らなかった世界や考え方に触れることで、知的好奇心を刺激され、自身の視野が広がることを実感しています。

幅広い分野の知識提供：複数の教員がそれぞれの専門分野（科学、文学、哲学、歴史、社会、情報、統計、体育など）から講義を行うことで、学生は「様々な先生方の講義を聞くことができた」「幅広い分野の基礎的な知識について説明していたこと」のように、多様な学問領域や社会問題に触れられます。

多角的な視点からの深い考察：同じテーマを異なる専門分野からアプローチされることで、「様々な観点から並行して課題を捉えており、自分があまり触れてこなかった分野や視点についての理解を深めることができた」のように、物事を多面的に捉え、深く考察する力が養われます。

現代社会や実生活との関連付け：学んだ知識が「生活や学校の場面の適切な日本語についてとても勉強になりました」「現在の教育問題について、様々な事例についてを学べることができた点」のように、現実世界や学生自身の身近な生活、将来のキャリアと結びつくことで、学びの意義が深まり、知的好奇心がさらに刺激されます。

2. 能動的な学びと相互理解を育む「対話と実践の場」

学生は受け身ではなく、自ら考え、表現し、他者と交流する機会が豊富にある授業で、より深い学びを実感し、コミュニケーション能力を向上させています。

活発なディスカッションと意見交換：「話し合いの時間が多く取れ、様々な立場からじっくり

と討論できた」「様々な人とディスカッションできたこと」のように、自分の意見を形成し、論理的に伝え、異なる意見を受け入れる練習ができる場合は非常に重視されています。

実践的な演習とアウトプット：「この授業を通じてまとまった日本語でも作文が前よりできるようになった」「インタビューによって日本語のコミュニケーションを改善することができました」といったコメントが示すように、実際に手を動かしたり、言語を運用したりする演習は、知識の定着とスキル習得に不可欠です。

多様な背景を持つ学生との交流：「いろんな国の学生とディスカッションできで、とても面白かったです」「様々な考え方をもった人がいてまた出身も違うので、多くの考え方を学べました」といった声は、異なる文化や視点を持つ仲間との交流が、異文化理解を深め、コミュニケーション能力の向上に大きく貢献することを示しています。

3. 学習を円滑に進める「分かりやすさとアクセシビリティ」

複数の教員が担当し、多様な内容を扱うオムニバス授業だからこそ、学生が迷わずに学習を進められるよう、授業内容や資料に関する配慮が不可欠です。

丁寧で具体的な説明：「先生の説明が分かりやすかった」「具体例に基づいて説明してくれたため、少し複雑な話も理解しやすかった」のように、抽象的な概念や専門用語を、平易な言葉や豊富な具体例、視覚資料を用いて分かりやすく説明する工夫が強く求められます。

質の高い教材と柔軟なアクセス：「レジュメが分かりやすかった」「授業内容が録画され、エルムスで視聴することが出来る」といったコメントは、整理された教材が事前に提供され、オンデマンド配信などでいつでも復習できる環境が、学生の学習効率を大きく高めることを示唆しています。

明確な授業ガイダンスと一貫性：「シラバスがとてもわかりやすくまとめられていて、復習の際大変役に立った」のように、授業の目的、各回の内容、評価方法などが明確に示され、特に複数の教員が担当する場合でも全体としての統一感があることが、学生の安心感に繋がります。

4. 学生の学習意欲を高める「教員の熱意と個性の魅力」

教員一人ひとりの教育への情熱と人間的な魅力が、学生の学習体験の質を大きく左右します。オムニバス形式では、様々な教員の個性に触れられることが、かえって魅力として作用することがあります。

情熱的で魅力的な授業：「先生の熱意が感じられたこと」「先生は(いい意味で)ハイテンションで授業は面白かった」といったコメントは、教員が自身の専門分野への情熱を伝え、学生の興味を引きつける魅力的な語り口で授業を行うことが、学習意欲の向上に直結することを示しています。

学生に寄り添う親身な姿勢：「先生が親切です」「先生が非常に優しく、質問を気軽に聞けました」のように、教員が学生の学習状況や感情に配慮し、親身にサポートする姿勢は、学生

の安心感と信頼感を高め、積極的に学ぶ姿勢を引き出します。

5. 学習負担を考慮した「効率的な運営と環境」

学びの質を維持しつつ、学生が無理なく学習を継続できるよう、透明性と効率性が重視されます。

適切な課題量と頻度：「課題の量が減ったり頻度が低くなったらもっと良いと思う。学びにはなれるが、負担がだんだん大きくなる感じがあった」といった声から、学びに繋がる課題は歓迎されるものの、他の授業との兼ね合いを考慮した無理のない量と頻度が望まれます。

快適な学習環境：「広い講義室でもプロジェクターが見やすかった」「音響設備がもう少し改善すると聞き取りやすい」といったコメントは、物理的な環境が学習に集中できる上で重要であることを示しています。

以上の要素を総合すると、学生が「受けて良かった」と感じるオムニバス授業は、多様な専門性を持つ教員が連携し、学生の知的好奇心と主体性を引き出し、実践的な学びと対話の機会を豊富に提供しながら、学習を支えるための分かりやすい説明ときめ細やかなサポートが行き届き、かつ学生の負担にも配慮された授業であると言えます。

(2)学生がうまくいっていないと感じるオムニバス授業

プロンプト：「教養科目 主題別科目」の具体的な科目群（「科学・技術の世界」「芸術と文学」「思索と言語」「社会の認識」「歴史の視座」）、「教養科目 総合科目」「情報学」「統計学」「体育学」「日本語に関する科目」「外国語科目」「外国語演習」「基礎科目（文系）」の自由記述から、うまくいっていないオムニバス授業の特徴を教えてください。

※「基礎科目」、「教養科目 一般教育演習」は本分析に含めていない

オムニバス授業は、複数の教員が担当することで多様な学びを提供する一方で、その特性ゆえに特有の課題も抱えがちです。学生のコメントからは、主に以下の5つの点で問題が生じると、授業が「うまくいっていない」と感じられていることが明らかになりました。

学生が「うまくいっていない」と感じるオムニバス授業の共通特徴

学生のコメントを総合すると、課題のあるオムニバス授業は、その多様性や専門性を生かされていだけでなく、学生の学習負担や理解度に十分配慮できていない点が共通しています。

1. 授業内容の連携不足と一貫性の欠如

複数の教員が担当するオムニバス形式だからこそ、教員間の連携や授業全体のデザインが重

要ですが、ここがうまくいっていないと学生は混乱します。

教員間の連携不足と内容の重複：「3人の教員がいたのでそれぞれで授業の進め方やレジュメの出し方が違って困惑した」「異なる先生同士で同じ内容の説明をしているときがあったので、講義内容の重複がなければ少し時間に余裕が生まれたのではないかと思った」といった声は、教員間で情報共有が不足し、授業の進め方や内容に統一性がないことへの不満を示しています。

全体像の不明瞭さ：「何をやるのかが不透明なことがばちばちあった」「最初に、いつどのパートをやっているテストなのか Moodle などに示してほしい」のように、授業全体の流れや各パートの位置づけが明確でないと、学生は学習の見通しを立てづらくなり、受動的になりがちです。

シラバスとの乖離：「シラバスからは文系の基礎となる様々なことについて学ぶと読み取れるのに、実際の授業は、すべてが先生の専門分野である考古学についてであり、非常につまらなかった」というコメントは、事前の説明と実際の授業内容が大きく異なることへの不満と、期待とのギャップを示しています。

2. 学習負担の不均衡と評価の不透明さ

学生の学習意欲や公平性に影響を与える、課題の量や評価方法に関する課題が見られます。

過剰または不均等な課題量：「毎週の課題で 800 字は少々多く感じた」「課題の量がかかり多い感じであった」のように、学生が他の授業や生活との両立が難しいと感じるほどの課題量は、学習の負担となるだけでなく、課題の質の低下にもつながります。また、担当教員によって課題の量や頻度が大きく異なることへの不満も散見されます。

評価の不公平感：「小テストの成績が評価に直結するのが...少々不満。おそらく友人と相談しながら受験している人もいると思うので、孤独な戦いを挑むのはちょっと厳しかった」「出席した学生としなかった学生で成績上の優劣がつきにくいのが気になりました」といったコメントは、評価基準の公平性や、学生の努力が適切に反映されないことへの懸念を示唆しています。

課題の連絡や期間設定の不備：「最終レポートのお知らせが遅かったです」「小レポートの期限が短め」のように、課題の連絡が遅かったり、提出期間が短すぎたりすると、学生は計画的に学習に取り組むことが困難になります。

3. 教材と説明の「分かりにくさ」

多様な内容を扱うオムニバス授業だからこそ、情報伝達の分かりやすさが極めて重要ですが、ここに大きな課題が見られます。

専門的すぎる、または不親切な説明：「理系の専門知識が出てくると自体に反対するわけではないが、その情報の多くが詳しい説明なしに終わっていたため理解できなかった点が多かつ

た。専門知識が出てきた際には解説をしてほしい」「もっと優しい日本語を使って欲しいです（日本語に関する科目）」のように、学生の前提知識に合わない専門用語の説明不足や、表現の難解さが理解を妨げています。

教材の質と提示方法の問題：「スライドが英語のため分かりづらかった」「レジュメがなく、九十分間講演会みたいな先生がいたので辛かったです。その日の授業前にアップロードしてほしいかったです」といったコメントは、スライドが読みづらい、配布されない、あるいは言語が適切でないなど、教材自体の質や提示方法に問題があることを示唆しています。

教員の話し方や進行の問題：「話が長い時があって、途中で集中力が切れると何を話しているかわからなくなるときがある」「語りに終始抑揚がない点」のように、教員の話し方や授業の進行が単調だと、学生の集中力が途切れ、内容が頭に入りにくくなります。

4. 学生の「参加機会の不足と質の低下」

対話や実践の機会が少ない、あるいはその質が低いと、学生の学びは深まらず、授業への満足度が低下します。

一方的な講義形式：「話を聞くだけでなく、参加できるようにしてほしいです」「授業が一方向過ぎる」といったコメントは、学生が主体的に関わる機会が少なく、受動的な学習に留まってしまうことへの不満を示しています。

ディスカッションの質のばらつきと固定化：「人によってディスカッションへの参加態度が様々で、ひどいグループの時は本当に議論がすまないときがあった」「同じ人で固まりがちであるので、席移動は毎回やるべきだと思う」のように、グループ内のメンバー固定化や、学生の参加意欲のばらつきが、せっかく設けたディスカッションの質を低下させています。

出席管理の欠如：「出席がないので集まりが悪い」「出席がなかったため、授業をとっていてもあまり参加していない人も多かったように見受けられた」といったコメントは、出席管理の欠如が、対面での活発な交流の機会を奪い、授業の質全体に悪影響を及ぼしていることを示唆しています。

5. 環境と教員の「配慮不足」

物理的な学習環境や、教員からのサポート体制の不備も、授業の質を損ね、学生の不満につながっています。

質問への対応不足や不適切さ：「質問で評価をつけるのは如何なものかと思う」のように、学生からの質問への対応が不足していたり、不適切だったりすると、学生は質問しづらい雰囲気に陥ります。

教員による授業範囲を超えた言動：「先生により、学生に主体的な学びを促しながら、疑問を感じている学生に対しても考えを押し付けているように見える場面があった。また、先生自身の意図は違ったとのことだったが、選挙の直前に特定の政党を批判するような場面があった」といったコメントは、教員が授業の範囲を超えた個人的な意見表明を行うことへの不満を示し

ています。

物理的な環境の問題：「後ろの方の席だと少しマイクの声が聞き取りづらかったです」「画面や前のスクリーンが見づらい」など、音響や視覚に関する問題が、授業への集中を妨げ、学習効果を低下させています。

以上のことから、うまくいっていないオムニバス授業は、その多様な特性を十分に生かせず、むしろ教員間の連携不足や、学生の学習負担・理解度への配慮の欠如が、学生の学習意欲や満足度を阻害していると言えるでしょう。学生は、単なる情報提供だけでなく、質の高い教材と環境の中で、能動的に学び、成長できる機会を求めていることが明確に見て取れます。

4. まとめと考察

4.1. 学生が求める授業からみる授業改善の観点

授業アンケートの自由記述を科目区分ごとに分類し、抽出されたカテゴリーやサブカテゴリーごとに代表的なコメントを挙げることで、学生からどのような感想や要望があったかを示してきた。ここでは、授業の設計や改善に際して役に立つと思われる考え方の一つとして、「レイヤーモデル」（鈴木，2006）を紹介するとともに、それに即して学生から求められている授業の特徴を整理していきたい。

「レイヤーモデル」は、「レベル-1：いらつきのなさ」「レベル0：ムダのなさ」「レベル1：わかりやすさ」「レベル2：学びやすさ」「レベル3：学びたさ」という5段階のレベルごとに教育の質の達成指標と、達成に適切な授業デザイン（インストラクショナルデザイン）の技法を提案している（表4.1）。もともとは高等教育におけるeラーニングを検討するために作られたものであるものの、教育全般での活用が可能である。教員が自分の教育実践の質全体を確認する時や、教育実践者が確認したい部分がどのレイヤーに当てはまるかをみていくことで、課題の所在を確認する手掛かりを得ることもできる（鈴木他，2016）。

レベル-1：いらつきのなさ

教育の実施に必要な必要最低限の学習環境の確保がされているか

レベル0：ムダのなさ

授業の中身がこれで良いのかをチェックし、ウソや偏りをなくすことで本来学ぶべきことに集中できるようにできているか

レベル1：わかりやすさ

学習内容をわかりやすく伝えるための情報デザインができているか

レベル2：学びやすさ

厳選した学習内容を効果的に学習者に身につけてもらえるか

レベル3：学びたさ

魅力があるか

表 4.1 レイヤーモデル（鈴木，2006（鈴木他，2016 をもとに作成））

e ラーニング（教育）の質	達成指標	主な ID 技法
レベル 3：学びたさ （魅力の要件）	継続的な学習意欲、没入感、つい余分なこと まで、将来像とのつながり、自己選択・自己 責任、好みとこだわり、ブランド、誇り	動機づけ設計法 （ARCS モデル） 成人学習学の原則
レベル 2：学びやすさ （学習効果の要件）	学習課題の特性に応じた学習環境、学習者ニ ーズにマッチした学習支援要素、共同体の学 び合い作用、自己管理学習、応答的環境	学習支援設計法 （9 教授事象） 構造化・系列化技法
レベル 1：わかりやすさ （情報デザインの要件）	操作性、ユーザビリティ、ナビゲーション、 レイアウト、テクニカルライティング	プロトタイピング 形跡の評価技法
レベル 0：ムダのなさ （内容の専門家的要件）	内容の正確さ、取り扱い範囲の妥当性、解釈 の妥当性、多様性の提示、情報の新鮮さ、根 拠・確からしさの提示、適正な著作権処理	ニーズ分析法 内容分析法 職務分析法
レベル-1：いらつきのなさ （精神衛生上の要件）	アクセス環境、充実した回線速度、IT 環境 のレベルに応じた代替の利用法、サービスの 安定度、安心感	学習環境分析 メディア選択技法

※詳しくは鈴木他（2016）をご参照ください。

このレイヤーモデルのレベルごとに、学生の自由記述をもとに学生から求められている授業の特徴をまとめた。各レベルで3つずつ授業を見直す観点が示されている。参照いただいている教員の皆様にはご自身の授業を改善する観点として参考にさせていただけると幸いである。

プロンプト：以下の報告から、学生が考える良い授業の特徴を「いらつきのなさ（精神衛生上の要件）」「ムダのなさ（効率的な授業の要件）」「わかりやすさ（情報デザインの要件）」「学びやすさ（学習効果の要件）」「学びたさ（授業の魅力の要件）」の5つの観点到分類していただきたいです。

レベル-1：いらつきのなさ（精神衛生上の要件）

この観点は、学生が心理的なストレスなく、安心して学べる環境が整っていることを指します。

教員の態度と配慮：教員が学生の個性や状況を尊重し、威圧的な言動がないことが重要です。学生の質問に親身に、かつ丁寧に答える姿勢や、間違いを恐れず発言できる雰囲気づくりが求められています。

不公平感のなさ：評価基準が明確で、教員間でのバラつきがないことが不可欠です。出席確認方法や課題の採点方法が公平であること、また、一部の学生だけが発言する状況を避け、全員に機会が与えられることが望まれています。

適切な情報提供：授業の進め方、評価基準、課題内容、ツールの使い方など、重要な情報が事前に、かつ分かりやすく共有されることが重要です。これにより、学生は不安なく学習計画を

立てられます。

レベル0：ムダのなさ（効率的な授業の要件）

この観点は、学生が限られた時間で最大限の学習効果を得られるよう、授業の運営が効率的に行われていることを指します。

適切なペースと構成：授業の進度が適切で、予習・復習のサイクルが無理なく回せる構成が評価されています。教員の話すスピードや、板書・スライドの表示ペースが学生の理解度に合わせて調整されることが求められています。

課題と評価の適切性：課題の量が多すぎず、他の授業とのバランスが考慮されていることが重要です。また、課題の目的が明確で、学習内容の定着に繋がる質の高い課題が望まれています。

ツールの効果的活用：オンラインツール（Moodle、Glexa など）が、単なる資料配布に留まらず、学習状況の可視化や効率的な情報共有に活用されることが期待されています。

レベル1：わかりやすさ（情報デザインの要件）

この観点は、授業内容が学生にスムーズに伝わるよう、情報が分かりやすく設計されていることを指します。

丁寧で明快な解説：専門用語や抽象的な概念が、具体的な例や分かりやすい言葉で噛み砕いて説明されることが最も重要です。特に初学者や、その分野を初めて学ぶ学生への配慮が強く求められています。

質の高い教材と資料：スライドや板書、レジュメなどが視覚的に分かりやすく、適切に整理されていることが重要です。誤字や不備がなく、授業外でも復習しやすい形で提供されることが望まれています。

円滑な情報伝達：教員の声が聞き取りやすく、マイクが適切に使用されるなど、物理的な環境が整っていることが求められています。

レベル2：学びやすさ（学習効果の要件）

この観点は、学生が主体的に学び、実用的なスキルや深い理解を得られる仕組みが整っていることを指します。

実践的な学習内容：単なる知識の暗記に留まらず、会話や演習、レポート作成など、実際に手を動かして使えるスキルを身につけられる内容が評価されています。学んだことが日常生活や将来のキャリアに役立つと感じられることが重要です。

体系的な学習サポート：授業資料の共有、課題の解答・解説、フィードバックの提供など、授業外での学習を支える仕組みが評価されています。これにより、学生は自律的に学習を進め、着実に知識を定着させることができます。

総合的な能力の向上：論理的思考力、批判的思考力、問題解決能力など、専門知識を超えた普

遍的なスキルを養う機会がある授業が望まれています。

レベル3：学びたさ（授業の魅力の要件）

この観点は、学生が授業に興味を持ち、学習意欲を維持できるような工夫や魅力があることを指します。

教員の熱意と専門性：教員が授業内容に熱意を持ち、深い専門知識を学生に伝えることが、学びを深めるきっかけとなります。教員の情熱は、学生の学習モチベーションを大きく引き上げます。

興味深いテーマと多様な視点：題材が面白く、飽きずに取り組めることが重要です。異文化や社会問題、様々な学問分野を多角的な視点から学ぶことで、知的好奇心が刺激され、視野が広がることが評価されています。

体験と交流の機会：ペアワークやグループワーク、フィールドワーク、留学生との交流など、学生同士が主体的に関わり、楽しみながら学べる機会が、授業の魅力を高めています。

この5つの観点は互いに関連しており、良い授業はこれらの要素がバランス良く備わっていると言えるでしょう。

鈴木 克明（2006）．IDの視点で大学教育をデザインする鳥瞰図——eラーニングの質保証レイヤーモデルの提案—— 日本教育工学会第22回講演論文集，pp.337-338.

鈴木 克明（監修）市川 尚・根本 淳子（編著）（2016）．インストラクショナルデザインの道具箱 101 北大路書房

4.2. 教員の授業に向けた想いと学生が求める授業の間の食い違い

前節には「学生が求める授業からみる授業改善の観点」をまとめた。しかしながら、学生による授業アンケートの自由記述からは、「学生にとって」の理想の授業しかとらえることができない。すなわち、教員の授業や学生に向けた想いが、学生からのポジティブなコメントとして必ずしも反映されるとは限らない。「はじめに」の章でも述べられているように、学生が答えてくれる「受けて良かった授業」と「改善した方が良い授業」は表裏一体である。ある学生は課題が多くて難しいことを歓迎するが、別の学生はそれは嫌だと考える。ある学生はひたすら知識をレクチャーされる授業が好きであるが、別の学生はひたすらレクチャーを聴くのは嫌でディスカッションやプレゼンテーションなどの能動的な活動を入れてほしいと考えていることもある。大学教員には、情熱的に授業をする人もいれば、内に情熱を秘めつつも冷静に淡々と授業をする人もいる。それぞれを好ましくとらえるか嫌だと捉えるかは、個々の学生の学習観や好みなどに依存するのである。そうであれば、授業アンケートの質問項目の数値によって教員を「評価」することは、教員の教育意欲を向上させることもあれば大きく削いでしまうこともあるだろう。

授業評価の取り組みや研究は、1980年代に東海大学で本格的に始まった。1990年代に

は大学教員が自発的な授業改善を目指して授業評価の方法や質問項目を試行錯誤する取り組みや研究が行われた。それらの中で、授業評価を教員評価に使用しないことが繰り返し強調されている（安岡，2007）。

2020年に文部科学省から示された「教学マネジメント指針」では、授業（評価）アンケートは教学IR（Institutional Research）で収集される重要なデータの一つとして言及されており、その在り方や役割は変化しつつある。授業アンケートが私たち大学教員に提供してくれる知見は、大学教員を一喜一憂させるものではない。学生と教員の双方にとって、今よりも効果的で効率的で魅力的な学習環境を構築するためのヒントとして提供される形に転換していくべき時期に来ている。

安岡 高志（2007）． 学生による授業評価の進展を探る 京都大学高等教育研究，（13）， 73-87.

文部科学省（2020）． 教学マネジメント指針 Retrieved July 11, 2025, from

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00001.html

付録 全体集計

A 授業内容

		全体	外国語	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均	ク ラ ス サ イ ズ (人)				
		平均	平均					25 以下	26 ～50	51 ～100	101 ～200	201 以上
1 シラバスは、授業の目標、内容、評価方法を明快に示していた。	5	39.60	43.04	37.29	50.42	35.39	45.51	51.31	41.92	35.77	35.91	39.54
	4	53.74	50.94	55.46	45.71	56.63	49.70	44.96	51.71	56.27	56.82	55.49
	3	5.14	4.54	5.63	2.85	6.22	3.62	2.76	4.62	6.37	5.57	3.73
	2	1.17	1.05	1.26	0.79	1.34	0.94	0.79	1.27	1.19	1.36	1.13
	1	0.34	0.43	0.37	0.23	0.43	0.23	0.18	0.48	0.40	0.33	0.11
	無回答	1.06	0.95	1.11	0.78	1.07	1.04	0.69	1.04	1.08	1.23	1.23
	平均値	4.31	4.35	4.28	4.45	4.25	4.39	4.46	4.33	4.26	4.27	4.33
2 授業はシラバスにそって行われていた。	5	41.95	44.29	39.79	52.09	37.48	48.22	52.86	43.68	38.13	39.71	40.88
	4	51.90	49.57	53.69	43.51	55.32	47.10	43.12	50.26	54.86	53.93	53.34
	3	4.99	4.88	5.31	3.49	5.89	3.73	3.32	4.61	5.74	5.41	4.27
	2	0.88	0.92	0.92	0.69	0.97	0.75	0.49	1.07	0.97	0.74	1.24
	1	0.28	0.34	0.30	0.21	0.34	0.20	0.20	0.38	0.30	0.21	0.28
	無回答	0.68	0.68	0.70	0.57	0.69	0.67	0.58	0.73	0.67	0.79	0.50
	平均値	4.34	4.37	4.32	4.47	4.29	4.42	4.48	4.36	4.30	4.32	4.33
3 授業で要求される作業量（レポート、宿題、自習など）は適切であった。	5	37.41	41.33	35.58	45.98	33.15	43.37	45.00	40.37	35.70	31.91	38.89
	4	47.61	45.07	48.48	43.55	48.03	47.03	43.90	47.14	50.14	44.21	53.18
	3	8.85	7.92	9.38	6.41	10.37	6.73	7.01	7.46	9.36	11.44	5.97
	2	4.57	4.37	4.82	3.40	6.14	2.36	3.56	3.77	3.70	8.59	1.69
	1	1.56	1.31	1.75	0.65	2.31	0.51	0.54	1.26	1.10	3.85	0.28
	無回答	0.53	0.59	0.51	0.62	0.53	0.52	0.61	0.59	0.42	0.54	0.73
	平均値	4.15	4.21	4.11	4.31	4.04	4.30	4.29	4.22	4.16	3.92	4.29
4 授業内容の難易度は適切であった。	A	6.39	5.19	7.06	3.26	8.05	4.07	3.60	5.50	8.31	6.29	4.66
	B	26.56	20.58	28.19	18.91	30.34	21.25	20.21	21.71	31.88	27.35	21.11
	C	60.62	65.97	59.03	68.11	56.07	67.00	67.23	64.22	55.20	60.58	66.82
	D	5.62	7.35	4.94	8.78	4.75	6.83	7.84	7.43	4.03	5.11	6.40
	E	0.81	0.91	0.78	0.95	0.79	0.85	1.12	1.14	0.58	0.68	1.01
	無回答	0.47	0.44	0.48	0.41	0.48	0.44	0.38	0.47	0.44	0.56	0.50
	平均値	4.07	4.20	4.02	4.28	3.94	4.24	4.25	4.15	3.93	4.07	4.22
設問1～4の合計	5	31.32	33.44	29.91	37.92	28.50	35.27	38.17	32.84	29.46	28.44	30.97
	4	44.94	41.52	46.44	37.91	47.56	41.25	38.04	42.69	48.27	45.55	45.76
	3	19.93	20.86	19.87	20.25	19.67	20.31	20.11	20.26	19.20	20.78	20.23
	2	3.06	3.43	2.99	3.42	3.30	2.73	3.17	3.39	2.48	3.96	2.62
	1	0.75	0.75	0.80	0.51	0.97	0.44	0.51	0.82	0.60	1.27	0.42
	無回答	0.68	0.66	0.70	0.60	0.69	0.67	0.57	0.71	0.65	0.78	0.74
	平均値	4.22	4.28	4.18	4.38	4.13	4.34	4.37	4.26	4.16	4.14	4.29

B 授業手法、教員の行動

		全体	外国語	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均	ク ラ ス サ イ ズ (人)				
		平均	平均					25 以下	26 ～50	51 ～100	101 ～200	201 以上
5 教員の説明はわかりやすかった。	5	32.11	39.65	29.28	45.32	27.72	38.25	46.19	36.59	28.09	24.49	34.12
	4	47.10	45.32	47.60	44.77	46.69	47.68	43.86	46.84	46.67	49.83	49.27
	3	13.49	10.89	14.76	7.59	16.04	9.94	7.73	11.45	15.74	16.05	11.60
	2	5.50	3.12	6.28	1.88	7.16	3.18	1.77	3.73	7.08	7.44	3.83
	1	1.79	1.02	2.08	0.44	2.39	0.95	0.46	1.39	2.41	2.18	1.18
	無回答	0.92	1.04	0.98	0.64	1.03	0.77	0.64	0.92	0.91	1.21	0.78
	平均値	4.02	4.19	3.96	4.33	3.90	4.19	4.34	4.14	3.91	3.87	4.11
6 教員の熱意が伝わってきた。	5	40.56	45.37	36.94	57.47	32.60	51.68	58.08	45.45	34.21	31.58	50.39
	4	43.25	40.84	44.77	36.19	45.70	39.84	35.41	42.55	45.69	46.13	40.83
	3	12.12	10.56	13.57	5.30	15.89	6.85	5.34	9.39	15.02	16.04	6.58
	2	3.28	2.46	3.80	0.86	4.70	1.30	0.92	1.82	4.21	5.02	1.91
	1	0.79	0.77	0.92	0.19	1.12	0.33	0.26	0.79	0.87	1.23	0.28
	無回答	0.86	1.09	0.92	0.60	0.99	0.68	0.41	1.07	0.90	1.04	0.67
	平均値	4.20	4.28	4.13	4.50	4.04	4.41	4.50	4.30	4.08	4.02	4.39
7 教員の話し方は聞き取りやすかった。	5	38.84	45.53	36.17	51.29	34.11	45.47	52.60	42.49	35.01	30.93	43.32
	4	43.84	41.57	44.67	39.97	44.69	42.66	39.36	42.87	44.85	46.83	41.96
	3	11.29	9.04	12.31	6.54	13.21	8.61	6.13	10.04	12.70	14.12	9.93
	2	4.55	2.89	5.14	1.80	5.99	2.53	1.61	3.33	5.58	6.21	3.55
	1	1.48	0.96	1.71	0.39	2.01	0.73	0.31	1.27	1.86	1.91	1.24
	無回答	0.86	1.03	0.94	0.51	0.97	0.71	0.38	1.09	0.76	1.19	0.95
	平均値	4.14	4.28	4.08	4.40	4.03	4.30	4.42	4.22	4.06	3.99	4.23
8 教員は効果的に学生の参加（発言、自主的学習、作業など）を促した。	5	30.38	41.88	25.77	51.66	25.08	37.77	52.40	37.82	22.47	20.42	34.77
	4	42.49	43.99	43.09	39.75	44.16	40.16	38.45	45.56	43.35	42.56	39.41
	3	18.29	10.38	20.80	6.70	20.67	14.97	7.28	11.90	23.05	23.64	17.04
	2	7.52	3.04	8.79	1.62	8.44	6.23	1.56	4.04	9.48	11.35	7.46
	1	1.32	0.72	1.55	0.28	1.65	0.87	0.31	0.67	1.65	2.02	1.32
	無回答	2.06	1.50	2.34	0.76	2.29	1.73	0.86	1.47	2.17	3.04	2.63
	平均値	3.93	4.23	3.83	4.41	3.83	4.08	4.41	4.16	3.75	3.68	3.99
9 教員は学生の質問・発言等に適切に対応した。	5	35.39	41.40	31.76	52.21	30.51	42.19	53.41	37.84	30.99	26.52	38.61
	4	47.27	45.94	48.79	40.17	49.42	44.26	39.46	48.87	48.83	49.63	45.63
	3	14.95	11.02	16.77	6.51	17.24	11.75	6.05	11.65	17.34	20.66	13.21
	2	1.91	1.27	2.14	0.84	2.24	1.46	0.80	1.33	2.18	2.68	2.10
	1	0.49	0.37	0.53	0.28	0.59	0.34	0.28	0.31	0.65	0.49	0.45
	無回答	1.88	1.78	2.07	1.01	2.11	1.56	0.89	1.78	2.10	2.48	1.45
	平均値	4.15	4.27	4.09	4.43	4.07	4.27	4.45	4.23	4.07	3.99	4.20
10 黒板、教科書、プリントやA/V機器等の使われ方が効果的であった。	5	37.40	40.48	35.14	48.01	33.44	42.95	48.66	38.71	33.95	34.40	36.78
	4	50.66	48.13	51.94	44.67	52.28	48.39	43.92	50.42	51.42	53.52	53.68
	3	8.91	8.87	9.54	5.91	10.46	6.73	5.94	8.36	10.47	9.41	6.91
	2	2.37	1.95	2.62	1.21	2.93	1.59	1.31	1.87	3.30	1.96	2.13
	1	0.66	0.58	0.76	0.21	0.89	0.34	0.18	0.65	0.86	0.72	0.51
	無回答	0.87	1.15	0.87	0.83	0.97	0.72	0.71	1.09	0.84	0.96	0.50
	平均値	4.22	4.26	4.18	4.39	4.14	4.32	4.40	4.25	4.14	4.19	4.24
設問5～10の合計	5	35.79	42.39	32.53	50.99	30.59	43.06	51.89	39.82	30.81	28.09	39.68
	4	45.77	44.30	46.82	40.92	47.16	43.84	40.07	46.18	46.81	48.10	45.15
	3	13.16	10.12	14.61	6.42	15.57	9.80	6.41	10.46	15.70	16.62	10.85
	2	4.19	2.46	4.79	1.37	5.24	2.71	1.33	2.69	5.30	5.77	3.49
	1	1.09	0.74	1.26	0.30	1.44	0.59	0.30	0.85	1.39	1.43	0.83
	無回答	1.24	1.26	1.35	0.72	1.39	1.03	0.65	1.24	1.28	1.66	1.16
	平均値	4.11	4.25	4.05	4.41	4.00	4.26	4.42	4.21	4.00	3.96	4.19

C 受講生の行動(1)

		全体	外国語	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均
		平均	平均				
11 この授業の自分の出席率は()%程度であった。	100	69.06	64.80	68.55	71.44	70.57	66.93
	80	26.61	28.40	26.51	27.08	24.05	30.20
	60	2.81	3.30	3.17	1.09	3.14	2.34
	40	0.70	1.30	0.81	0.21	0.95	0.36
	20	0.82	2.20	0.96	0.18	1.29	0.17
	無回答	0.38	0.41	0.38	0.39	0.41	0.35
	平均値	4.62	4.52	4.61	4.69	4.62	4.63
12 質問、発言、調査、自習などにより、自分はこの授業に積極的に参加した。	5	24.09	27.74	21.74	35.05	21.69	27.46
	4	46.93	49.02	46.33	49.70	46.51	47.52
	3	20.02	15.54	21.90	11.27	21.64	17.75
	2	7.65	6.45	8.54	3.52	8.63	6.29
	1	1.31	1.25	1.49	0.46	1.54	0.98
	無回答	1.41	1.23	1.54	0.78	1.53	1.23
	平均値	3.85	3.96	3.78	4.15	3.78	3.94
13 この授業1回(90分)のための予習・復習に費やした時間は平均()であった。	4H以上	2.96	2.30	2.86	3.42	3.31	2.47
	3H	5.20	5.03	5.15	5.45	6.35	3.58
	2H	17.20	17.95	17.36	16.45	20.81	12.14
	1H	38.51	44.45	37.85	41.60	41.13	34.84
	30分以下	36.13	30.27	36.79	33.08	28.40	46.98
	無回答	0.37	0.46	0.35	0.44	0.33	0.42
	平均値	2.00	2.05	1.99	2.05	2.15	1.80
設問11～13の合計	5	32.06	31.63	31.08	36.64	31.89	32.31
	4	26.17	27.43	25.92	27.39	25.55	27.04
	3	13.32	12.25	14.11	9.60	15.17	10.72
	2	15.65	17.42	15.76	15.12	16.94	13.84
	1	12.80	11.26	13.13	11.25	10.45	16.08
	無回答	0.72	0.70	0.76	0.54	0.76	0.67
	平均値	3.49	3.51	3.46	3.63	3.51	3.46

C 受講生の行動(2)

		授業法 平均	学生 参加 平均	難易度						ク ラ ス サ イ ズ (人)				
				A	B	C	D	E	無回答	25 以下	26 ～50	51 ～100	101 ～200	201 以上
11 この授業の自分の出席率は()%程度であった。	5	4.13	4.02	67.18	67.90	69.90	67.10	74.37	61.40	71.50	66.03	69.23	69.45	68.76
	4	4.08	3.93	26.90	27.80	26.03	28.33	17.09	28.07	26.82	29.33	24.59	27.30	28.60
	3	3.74	3.57	3.76	3.02	2.57	2.75	4.02	10.53	1.25	3.07	3.50	2.73	2.13
	2	3.55	3.35	0.96	0.66	0.67	0.80	2.01	0.00	0.26	0.64	1.12	0.44	0.34
	1	3.30	3.11	1.21	0.63	0.83	1.01	2.51	0.00	0.18	0.93	1.57	0.08	0.17
	無回答	1.45	1.35	0.25	0.15	0.13	0.14	0.50	50.43	0.36	0.40	0.34	0.46	0.39
	平均値	4.61	4.59	33.79	16.48	26.09	24.93	39.57	36.84	35.55	26.57	20.55	20.42	22.51
12 質問、発言、調査、自習などにより、自分はこの授業に積極的に参加した。	5	4.08	3.98	28.07	47.75	48.80	47.58	25.13	35.09	49.21	49.83	45.23	46.21	46.21
	4	3.80	3.60	20.21	23.51	18.76	17.23	18.18	19.30	11.46	15.98	23.37	23.07	21.78
	3	3.58	3.36	12.48	10.82	5.63	8.58	11.23	8.77	3.31	6.59	9.23	8.76	8.14
	2	3.06	2.89	5.46	1.44	0.73	1.69	5.88	0.00	0.49	1.03	1.63	1.55	1.36
	1	2.83	2.09	2.16	1.29	0.94	1.30	6.50	50.43	0.79	1.11	1.52	1.96	1.23
	無回答	4.17	4.22	13.31	2.94	1.90	2.11	7.04	3.45	3.16	2.90	2.78	3.71	1.40
	平均値	4.02	4.09	8.73	7.06	4.27	2.61	1.51	12.07	5.97	4.55	5.08	6.36	2.30
13 この授業1回(90分)のための予習・復習に費やした時間は平均()であった。	5	4.05	4.04	21.15	20.63	16.09	9.01	11.56	22.41	18.20	17.07	18.37	17.77	7.35
	4	4.13	4.02	31.21	39.33	39.59	33.19	26.63	31.03	40.48	41.42	40.97	31.83	33.50
	3	4.08	3.85	25.61	30.03	38.14	53.09	53.27	31.03	32.18	34.06	32.79	40.33	55.44
	2	1.44	1.24	0.19	0.15	0.10	0.36	0.50	49.57	0.38	0.47	0.25	0.46	0.45
	1	4.25	4.17	38.11	29.15	32.64	31.42	40.34	33.72	36.74	31.85	30.88	31.25	30.92
	無回答	4.08	3.97	21.18	27.46	26.30	26.11	14.36	25.00	27.30	27.86	24.88	26.53	25.65
	平均値	3.90	3.79	15.01	15.69	12.46	9.63	11.11	17.44	10.30	12.03	15.05	14.48	10.39
設問11～13の合計	5	4.03	3.90	14.90	16.96	15.33	14.20	13.33	13.37	14.69	16.23	17.14	13.70	14.01
	4	4.03	3.80	10.80	10.74	13.27	18.64	20.85	10.47	10.96	12.03	12.05	14.05	19.03
	3	2.35	1.81	0.87	0.53	0.39	0.60	2.50	50.14	0.51	0.66	0.71	0.96	0.69
	2	4.17	4.22	13.31	2.94	1.90	2.11	7.04	3.45	3.16	2.90	2.78	3.71	1.40
	1	4.02	4.09	8.73	7.06	4.27	2.61	1.51	12.07	5.97	4.55	5.08	6.36	2.30
	無回答	4.05	4.04	21.15	20.63	16.09	9.01	11.56	22.41	18.20	17.07	18.37	17.77	7.35
	平均値	4.13	4.02	31.21	39.33	39.59	33.19	26.63	31.03	40.48	41.42	40.97	31.83	33.50

D 教育効果(1)

		全体 平均	外国語 平均	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均
14 シラバスに記載されている到達目標は、() 制程度達成できた。	10	11.26	11.23	10.56	14.51	10.30	12.60
	9	15.98	16.50	14.91	20.98	14.37	18.24
	8	32.24	32.91	31.62	35.12	30.85	34.18
	7	22.55	22.48	23.29	19.09	23.23	21.59
	6	10.45	10.09	11.18	7.05	11.93	8.37
	5	4.67	4.25	5.21	2.17	5.65	3.30
	4	1.31	1.00	1.49	0.46	1.67	0.81
	3	0.80	0.63	0.93	0.21	1.07	0.44
	2	0.36	0.31	0.40	0.16	0.48	0.20
	1	0.18	0.25	0.20	0.09	0.19	0.16
	0	0.19	0.34	0.20	0.16	0.24	0.13
	無回答	0.50	0.50	0.51	0.46	0.49	0.51
	平均値	7.67	7.70	7.59	8.05	7.53	7.86

D 教育効果(2)

		授業法 平均	学生 参加 平均	難易度						ク ラ ス サ イ ズ (人)				
				A	B	C	D	E	無回答	25 以下	26 ～50	51 ～100	101 ～200	201 以上
14 シラバスに記載されている到達目標は、() 制程度達成できた。	10	4.51	4.42	17.09	5.80	12.20	16.00	40.50	10.53	14.68	11.59	9.95	10.64	11.78
	9	4.29	4.17	8.61	9.96	18.43	26.14	20.00	7.02	20.90	17.56	13.94	15.09	14.97
	8	4.16	4.03	17.22	28.19	35.68	32.66	21.00	38.60	35.25	33.28	30.07	32.80	33.15
	7	3.99	3.86	17.16	27.70	21.57	16.44	10.00	29.82	19.01	22.11	23.43	23.68	23.39
	6	3.83	3.69	13.84	16.84	7.81	5.94	3.00	10.53	7.04	9.35	12.32	10.46	10.49
	5	3.58	3.50	11.10	7.48	3.08	1.74	2.50	3.51	1.91	4.01	6.17	4.77	4.04
	4	3.39	3.33	5.10	2.24	0.60	0.51	0.00	0.00	0.54	0.88	1.91	1.34	0.79
	3	3.26	3.26	4.66	1.07	0.32	0.51	0.50	0.00	0.26	0.45	1.26	0.68	0.79
	2	2.93	2.93	2.55	0.46	0.10	0.00	2.00	0.00	0.10	0.24	0.57	0.31	0.28
	1	2.83	3.06	1.21	0.17	0.09	0.00	0.00	0.00	0.15	0.17	0.23	0.10	0.22
	0	2.31	2.47	1.47	0.08	0.11	0.07	0.50	0.00	0.15	0.36	0.18	0.14	0.11
	無回答	2.17	2.05	0.32	0.35	0.25	0.07	0.00	50.43	0.38	0.69	0.40	0.67	0.39

D 教育効果(3)

		全体 平均	外国語 平均	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均
15 授業により知的に刺激され、さらに深く勉強したくなった。	5	28.07	28.49	25.62	39.56	22.66	35.65
	4	48.34	48.28	48.58	47.22	48.15	48.60
	3	15.96	15.84	17.24	9.95	19.32	11.25
	2	6.05	5.49	6.79	2.58	7.83	3.55
	1	1.59	1.89	1.78	0.70	2.05	0.95
	無回答	0.74	0.79	0.71	0.87	0.75	0.73
	平均値	3.95	3.96	3.89	4.22	3.82	4.14
16 授業は全体として満足できるものであった。	5	36.85	41.20	33.33	53.32	29.54	47.10
	4	48.20	45.76	49.72	41.11	50.62	44.81
	3	10.15	8.69	11.50	3.84	13.42	5.57
	2	3.49	2.86	3.97	1.20	4.66	1.85
	1	1.31	1.48	1.48	0.53	1.77	0.67
	無回答	0.58	0.50	0.60	0.48	0.58	0.58
	平均値	4.16	4.22	4.09	4.45	4.01	4.36
設問15～16の合計	5	32.46	34.86	29.48	46.45	26.10	41.38
	4	48.27	47.02	49.15	44.16	49.39	46.70
	3	13.05	12.26	14.37	6.89	16.36	8.41
	2	4.77	4.18	5.38	1.89	6.24	2.70
	1	1.45	1.68	1.63	0.61	1.91	0.81
	無回答	0.67	0.65	0.66	0.68	0.67	0.66
	平均値	4.06	4.09	3.99	4.34	3.92	4.25

D 教育効果(4)

		授業法 平均	学生 参加 平均	難易度						ク ラ ス サ イ ズ (人)				
				A	B	C	D	E	無回答	25 以下	26 ～50	51 ～100	101 ～200	201 以上
15 授業により知的に刺激され、さらに深く勉強したくなった。	5	4.66	4.51	28.90	17.72	32.03	31.15	43.72	25.00	41.65	28.58	24.14	23.96	30.01
	4	4.08	3.93	24.30	48.66	50.76	50.98	28.64	44.64	45.72	48.74	47.82	50.13	50.73
	3	3.62	3.54	20.40	21.47	13.47	12.13	12.56	17.86	9.71	15.36	18.49	17.32	13.57
	2	3.24	3.33	15.60	10.34	3.26	4.79	5.03	12.50	2.18	5.62	7.62	6.89	4.67
	1	2.38	2.62	10.81	1.80	0.48	0.94	10.05	0.00	0.74	1.70	1.93	1.71	1.01
	無回答	2.83	2.74	0.57	0.46	0.53	0.36	0.50	51.30	0.74	0.95	0.62	0.79	0.78
	平均値	4.68	4.48	30.98	23.12	42.53	45.24	51.26	32.76	54.81	40.93	31.00	29.89	39.16
16 授業は全体として満足できるものであった。	5	3.98	3.83	24.67	53.43	49.14	44.07	22.11	46.55	39.77	46.22	49.79	52.40	50.79
	4	3.27	3.34	20.97	16.55	6.57	6.11	8.54	17.24	3.65	8.58	13.27	11.83	6.52
	3	2.73	3.03	13.64	5.56	1.49	3.35	5.53	3.45	1.35	2.77	4.30	4.46	2.70
	2	1.82	2.29	9.75	1.35	0.27	1.24	12.56	0.00	0.41	1.50	1.64	1.42	0.84
	1	2.41	2.28	0.25	0.32	0.36	0.51	0.50	49.57	0.46	0.62	0.51	0.79	0.56
	無回答	4.67	4.49	29.94	20.42	37.28	38.19	47.49	28.95	48.24	34.77	27.57	26.93	34.59
	平均値	4.03	3.88	24.48	51.05	49.95	47.53	25.38	45.61	42.74	47.48	48.80	51.26	50.76
設問15～16の合計	5	3.49	3.46	20.68	19.01	10.02	9.12	10.55	17.54	6.68	11.96	15.88	14.58	10.04
	4	3.05	3.22	14.62	7.95	2.38	4.07	5.28	7.89	1.76	4.19	5.96	5.67	3.68
	3	2.13	2.47	10.28	1.57	0.37	1.09	11.31	0.00	0.58	1.60	1.78	1.56	0.93
	2	2.64	2.54	0.41	0.39	0.45	0.43	0.50	50.43	0.60	0.78	0.56	0.79	0.67

全体集計1(1) アンケート回答数全体の平均

		全体 平均	外国語 平均	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均
設問1～2, 5～10, 15～16の平均値	回答数	24,727	6,810	20,379	4,348	14,433	10,294
	平均値1	4.14	4.24	4.09	4.41	4.04	4.29
	標準偏差	0.4223	0.4189	0.4235	0.3453	0.4267	0.3606

全体集計1(2) 授業毎平均値の平均

		全体 平均	外国語 平均	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均
設問1～2, 5～10, 15～16の平均値	授業数	918	393	558	360	437	481
	平均値2	4.23	4.26	4.11	4.42	4.07	4.38
	標準偏差	0.3455	0.3368	0.3381	0.2643	0.3390	0.2805

全体集計2

		職 (人)					授業の形態 (人)		必修・選択 (人)		アンケート 提出枚数 (枚)
		教授	准教授	講師	助教	非常勤	講義	演習	必修	選択	
全 体		349	279	56	67	167	558	360	437	481	24,727
外国語		89	145	23	26	110	166	227	217	176	6,810
所 属 部 局	文学研究院	01	35	14	5	8	0	48	14	5	57
	教育学研究院	02	11	5	1	0	0	13	4	2	15
	法学研究科	03	10	2	0	4	0	13	3	4	12
	経済学研究院	04	8	7	2	6	0	18	5	1	22
	理学研究院	05	57	37	10	4	0	96	12	84	24
	医学研究院	06	6	1	0	4	0	2	9	0	11
	歯学研究院	07	3	2	0	2	0	3	4	0	7
	薬学研究院	08	1	6	1	2	0	6	4	5	5
	工学研究院	09	20	18	1	3	0	26	16	21	21
	農学研究院	10	8	5	1	1	0	8	7	6	9
	獣医学研究院	11	4	1	0	0	0	3	2	1	4
	水産科学研究院	12	3	2	0	0	0	5	0	0	5
	メディア・コミュニケーション研究院	13	90	137	23	16	0	127	139	158	108
	保健科学研究院	14	3	2	0	0	0	2	3	1	4
	情報科学研究院	15	10	8	0	0	0	9	9	6	12
	地球環境科学研究院	16	18	8	0	1	0	22	5	18	9
	先端生命科学研究院	17	2	4	0	1	0	6	1	4	3
	公共政策学連携研究部	18	4	1	0	0	0	4	1	2	3
	北海道大学病院	19	1	0	0	0	0	1	0	0	1
	低温科学研究所	20	4	1	0	0	0	1	4	1	4
	電子科学研究所	21	6	1	0	8	0	11	4	9	6
	遺伝子病制御研究所	22	3	1	0	0	0	2	2	1	3
	触媒科学研究所	23	3	0	0	0	0	2	1	2	1
	スラブ・ユーラシア研究センター	24	2	0	0	0	0	1	1	0	2
	情報基盤センター	25	7	2	0	0	0	7	2	5	4
	アイソトープ総合センター	26									
	量子集積エレクトロニクス研究センター	27	3	0	0	0	0	3	0	1	2
	総合博物館	28	0	1	0	0	0	1	0	0	1
	北方生物圏フィールド科学センター	29	6	4	0	0	0	1	9	0	10
	人獣共通感染症リサーチセンター	30	2	1	0	0	0	1	2	0	3
	大学図書館	31									
	観光学高等研究センター	32	0	1	0	0	0	1	0	0	1
	アイヌ・先住民研究センター	33	1	0	0	0	0	1	0	0	1
	社会科学実験研究センター	34									
	環境健康科学研究教育センター	35									
	北極域研究センター	36									
	サステイナビリティ学教育研究センター	37									
	保健センター	38	1	0	0	0	0	1	0	0	1
	埋蔵文化財調査センター	39									
	人材育成本部	40									
	創成研究機構	41									
	数理・データサイエンス教育研究センター	42									
	高等教育推進機構	43	15	4	10	4	0	10	23	6	27
	安全衛生本部	44									
	産学・地域協働推進機構	45									
	国際連携研究教育局	46									
	学生相談総合センター	47	0	0	1	0	0	1	0	0	1
	総合IR室	48									
	大学院教育推進機構	49	2	3	1	3	0	2	7	0	9
	その他	98									
	非常勤講師 (全学教育科目)	99	0	0	0	0	167	100	67	94	73

全体集計3

設問	平均	全体平均				外国語平均			
		講義	演習	必修	選択	講義	演習	必修	選択
1	4.31	4.28	4.45	4.25	4.39	4.29	4.43	4.30	4.45
2	4.34	4.32	4.47	4.29	4.42	4.31	4.44	4.31	4.47
3	4.15	4.11	4.31	4.04	4.30	4.13	4.31	4.14	4.35
4	4.07	4.02	4.28	3.94	4.24	4.12	4.30	4.15	4.30
5	4.02	3.96	4.33	3.90	4.19	4.10	4.33	4.11	4.37
6	4.20	4.13	4.50	4.04	4.41	4.14	4.46	4.17	4.49
7	4.14	4.08	4.40	4.03	4.30	4.21	4.37	4.22	4.39
8	3.93	3.83	4.41	3.83	4.08	4.12	4.38	4.14	4.42
9	4.15	4.09	4.43	4.07	4.27	4.17	4.41	4.18	4.45
10	4.22	4.18	4.39	4.14	4.32	4.18	4.37	4.20	4.38
15	3.95	3.89	4.22	3.82	4.14	3.83	4.14	3.86	4.17
16	4.16	4.09	4.45	4.01	4.36	4.09	4.41	4.11	4.45
平均	4.14	4.08	4.39	4.03	4.29	4.14	4.36	4.16	4.39
11	4.62	4.61	4.69	4.62	4.63	4.42	4.66	4.47	4.64
12	3.85	3.78	4.15	3.78	3.94	3.86	4.09	3.88	4.11
13	2.00	1.99	2.05	2.15	1.80	2.08	2.00	2.07	2.00
平均	3.49	3.46	3.63	3.51	3.46	3.45	3.58	3.47	3.58

A 授業内容

		全体 平均	外国語 平均	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均
1 シラバスは、授業の目標、内容、評価方法を明快に示していた。	5及び4	93.34	93.98	92.75	96.13	92.02	95.21
	2及び1	1.51	1.48	1.63	1.02	1.77	1.17
2 授業はシラバスにそって行われていた。	5及び4	93.85	93.86	93.48	95.60	92.80	95.32
	2及び1	1.16	1.26	1.22	0.90	1.31	0.95
3 授業で要求される作業量（レポート、宿題、自習など）は適切であった。	5及び4	85.02	86.40	84.06	89.53	81.18	90.40
	2及び1	6.13	5.68	6.57	4.05	8.45	2.87
4 授業内容の難易度は適切であった。	A及びB	32.95	25.77	35.25	22.17	38.39	25.32
	D及びE	6.43	8.26	5.72	9.73	5.54	7.68

B 授業手法、教員の行動

		全体 平均	外国語 平均	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均
5 教員の説明はわかりやすかった。	5及び4	79.21	84.97	76.88	90.09	74.41	85.93
	2及び1	7.29	4.14	8.36	2.32	9.55	4.13
6 教員の熱意が伝わってきた。	5及び4	83.81	86.21	81.71	93.66	78.30	91.52
	2及び1	4.07	3.23	4.72	1.05	5.82	1.63
7 教員の話し方は聞き取りやすかった。	5及び4	82.68	87.10	80.84	91.26	78.80	88.13
	2及び1	6.03	3.85	6.85	2.19	8.00	3.26
8 教員は効果的に学生の参加（発言、自主的学習、作業など）を促した。	5及び4	72.87	85.87	68.86	91.41	69.24	77.93
	2及び1	8.84	3.76	10.34	1.90	10.09	7.10
9 教員は学生の質問・発言等に適切に対応した。	5及び4	82.66	87.34	80.55	92.38	79.93	86.45
	2及び1	2.40	1.64	2.67	1.12	2.83	1.80
10 黒板、教科書、プリントやA V 機器等の使われ方が効果的であった。	5及び4	88.06	88.61	87.08	92.68	85.72	91.34
	2及び1	3.03	2.53	3.38	1.42	3.82	1.93

C 受講生の行動(1)

		全体 平均	外国語 平均	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均
11 この授業の自分の出席率は()%程度であった。	100及び80	95.67	93.20	95.06	98.52	94.62	97.13
	60・40・20	4.33	6.80	4.94	1.48	5.38	2.87
12 質問、発言、調査、自習などにより、自分はこの授業に積極的に参加した。	5及び4	71.02	76.76	68.07	84.75	68.20	74.98
	2及び1	8.96	7.70	10.03	3.98	10.17	7.27
13 この授業1回(90分)のための予習・復習に費やした時間は平均()であった。	3時間以上 (4H以上及び3H)	8.16	7.33	8.01	8.87	9.66	6.05
	1時間以下 (1H・30以下)	74.64	74.72	74.64	74.68	69.53	81.82

D 教育効果(1)

		全体 平均	外国語 平均	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均
14 シラバスに記載されている到達目標は、()割程度達成できた。	8割以上 (10割～8割)	59.48	60.64	57.09	70.61	55.52	65.02
	5割以下 (5割～0割)	7.51	6.78	8.43	3.25	9.30	5.04

D 教育効果(3)

		全体 平均	外国語 平均	講義 科目 平均	演習 科目 平均	必修 科目 平均	選択 科目 平均
15 授業により知的に刺激され、さらに深く勉強したくなった。	5及び4	76.41	76.77	74.20	86.78	70.81	84.25
	2及び1	7.64	7.38	8.57	3.28	9.88	4.50
16 授業は全体として満足できるものであった。	5及び4	85.05	86.96	83.05	94.43	80.16	91.91
	2及び1	4.80	4.34	5.45	1.73	6.43	2.52